

アイス

さく・おかもと
たくや



◆ 目次



第1章 不思議な世界・・・3

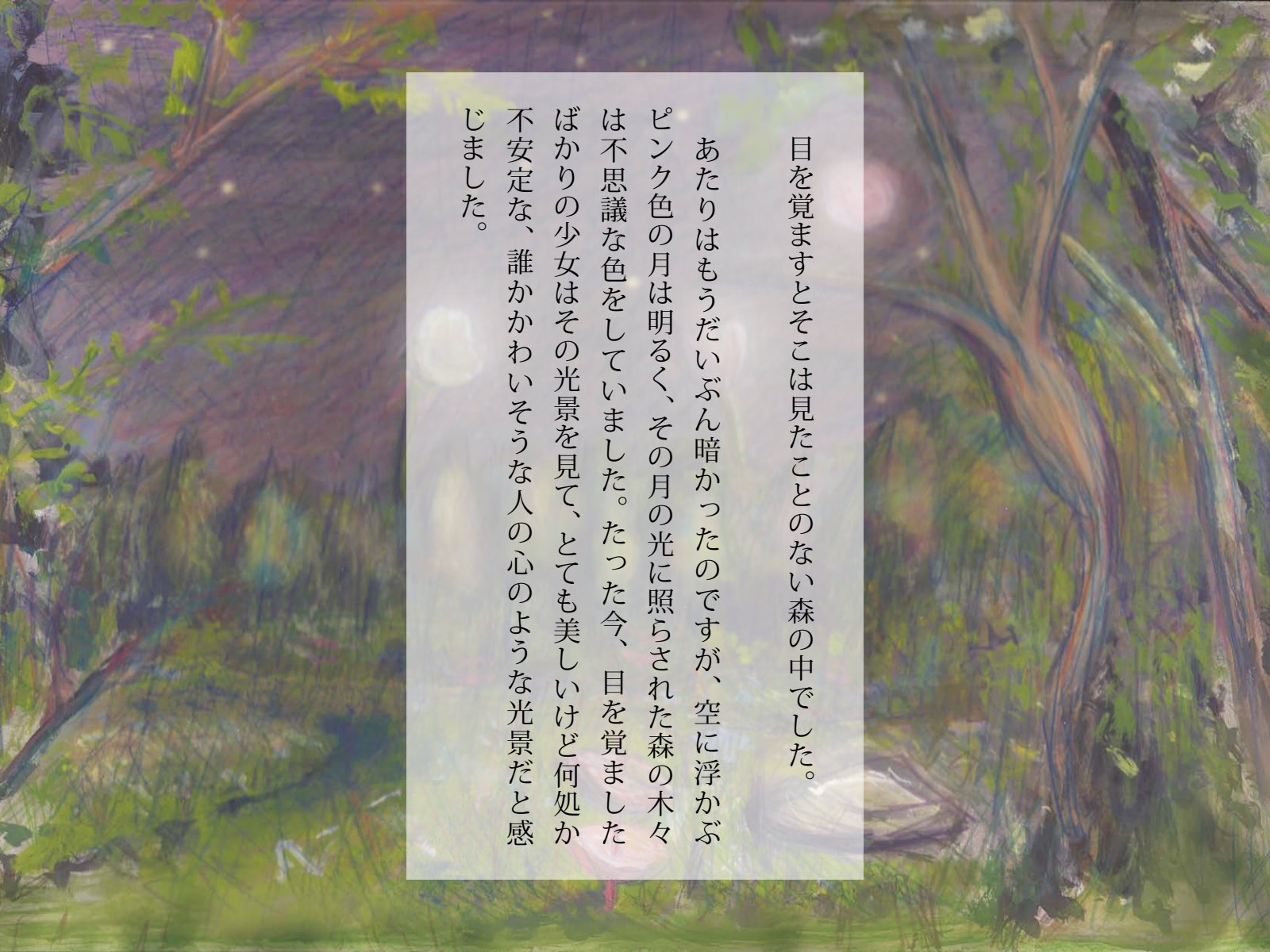
第2章 タムの物語・・・82

第3章 奇跡の石・・・94

エピローグ・・・183

第1章 不思議な世界





目を覚ますとそこは見たことのない森の中でした。

あたりはもうだいぶん暗かったのですが、空に浮かぶピンク色の月は明るく、その月の光に照らされた森の木々は不思議な色をしていました。たった今、目を覚ましたばかりの少女はその光景を見て、とても美しいけど何処か不安定な、誰かかわいそうな人の心のような光景だと感じました。

少女がしばらくそこでじっとしながらその淡い色の交響曲の中に溶けていると、しだいに暗さがそこにあった色達を飲み込んでいきます。

気づくとあたりは真っ暗になっていました。見上げると空には雲がかかり、ついさっきまであんなにでしゃばって輝いていたカラフルな月は姿を隠してしまっています。

「ここは一体何処だろう、私は何でこんなところにいるんだっけ？」

少女はとりとめのない不安に似た感情を思い出しましたが頭の中がまだぼんやりとして色々なことが曖昧なまま泥の中に沈んでいるようなカンジです。



その時、少女の視界の端に緑の光が浮かんたような気がしました。

「何だろう、あれ？」

ゆっくりと目を凝らすと確かに森の奥にやわらかく緑色の光を放っている場所があります。気づくと少女は吸い寄せられるようにそちらの方へと向かっていました。

暗くてよくわかりませんが、近づくにつつちはかなり大きな泉のような場所があり、光っていたのはどうやらその水辺にある石の中の1つのようなでした。少女がそばまで行って見てみるとその石は滑らかで綺麗なハートの形をしていてどういう原理でなのか内側からやさしい緑色の光を放射しています。

「綺麗…。」



少女がその石に触れてみると、突然、なつかしい心地の浮遊感と共に静かで大きな波のような感情が流れ込んできました。その波は目を覚ました時からずっと少女の心の表面をおおっていたぼんやりとした靄を押し流していきます。

少女はしだいに色んなことを思い出しました。

少女の名前はサヤ。この間、誕生日を迎えたばかりの16歳。サヤはサイタマケンにある大きな病院に入院していたはずの少女でした。



「そう、確か私は手術を受けることになっていたんだ。」
サヤは思い出しました。

サヤは何かの大きな手術を受けることになっていて麻酔を打たれ、何か大切なことを祈りながら眠りの中に落ちていき、気づいたらココにいたのです。

「けど病院にいたはずの私が何でこんな不思議な森の中にいるんだろう？これは夢なのかな？」

サヤは色々と理由を考えましたがまったく思い当たることはありません…。

「あれ、…そういえば私ってあの時、何を祈ってたんだっけ？」

サヤはふと自分の記憶の中にまだ抜け落ちたままの穴があることに気づきました。サヤは手術の前、自分が神サマに向かって何かを祈ってしまったていて、誰もその切実な心の声に答えてくれないまま意識が消えていくことが怖くて怖くて仕方がなかったということを結構はつきり覚えています。けど、その時に祈ったことが何だったのかはどうしても思い出せないのです。…サヤは何となくその祈ったことの内容が今、目の前にあるこの不思議な森の光景とつながっているような気がぼんやりとするのでした。

サヤがそんなことを考えているとまた雲が晴れ始め、再びピンク色の大きな月が空の余白に顔を出しました。月の光はサヤとサヤの立っていた足下に広がる泉をも照らしサヤの姿を水面に写し出します。

水面に写し出された自分の姿を見たサヤは驚きと共に心臓が止まるかと思う程のショックを受けました。

何故かサヤの身体のあちこちからたくさんの黒い霧状のツバサが生えていたのです。





「何コレ!? 一体どういことなの? 何の冗談よ、この黒いの!」

サヤは急にパニックになってしまいました。

サヤはツバサをひきちぎろうとしますが、ツバサは霧のようなもので出来ているからなのか掴むことさえ出来ません。

……。

観念したサヤが数えてみるとツバサの数は全部で11枚あります。

何よコレ…。

見知らぬ世界で見知らぬ自分、曖昧な記憶…。

サヤは自分をこんな目にあわせるような神サマに何かお願いをしようとした自分を呪いたくなりました。



サヤが自分の姿に困惑していると、それをなだめてくれるかのように何処からかかすれてひずんだ音色のような響きがきこえてくる気がします。「帰りたい。」サヤは疲れてそうつぶやいてしまいましたが目の前の光景は動くことなくただそこに居座っていました。

「…、あれ？」

最初は気のせいかと思いましたがじつと耳をすますと何処かで確かに本当に音がなっています。それはハーモニカか何かの音のようでした。

一体いつからなっていたんだろう？もしかしたら私が気づかなかっただけでかなり前からなっていたのかもしれない。

……。

けど不思議な音。優しくも冷淡でもない。…もしかしたら逆に優しくも冷淡でもあるってことかもしれないけど。

サヤは音の方に行ってみることにしました。サヤは何となく先程見つけた緑色に光るハート型の不思議な石をポケットにつっこみ、音をたよりに右の方へ歩いていきました。

近づいていくと何だか肉の焼けるような香ばしい匂いがしてきます。

「何のニオイだろ？」

サヤは歩きながら自分のお腹がペコペコなことに気づきました。

ひずんだ音色の元には少し森の開けた場所がありました。きこえていた音はやっぱりハーモニカの音色だったようです。その開けた場所には焚き火にあたりながら荷物の上に座ってハーモニカを吹いている1人の青年がいました。



奇妙なことにこの青年の背中にも1枚の白い霧状のツバサが生えています。サヤはそれを見て一瞬「この世界はやっぱ天国なのかもしれない」と思いましたが、もしそうだとしたらお父さんや数少ないけど大切なトモダチ達に二度と会えない、ということが怖くなったので「天国だったらこんなふうにお腹がすいたりするわけじゃないじゃないっ」と自分に言い聞かせました。火のまわりにはソーセージのようなものが刺さった棒が置いてあり、とてもいいニオイをただよわせています。サヤは白いツバサの青年に声をかけることにしました。

「あの…」

サヤの声をきくと青年は驚きハーモニカを吹く手を止めました。

「あの、こんばんは。…ココは何処ですか？」

青年は値踏みするようにサヤとサヤに生えた11枚の黒いツバサを見ながら黙っていました。サヤはもしかしたら自分の真っ黒いツバサと青年の白く美しいツバサは同じものではないかもしれない、と今さらのように気づきました。

「君は誰だい？」青年は警戒しながら言いました。

「サヤです。」サヤは答えました。

「君みたいな女のコがこんなところで何してるの？」

「わかりません。気づいたらあっちにある泉の近くにいたんです。」

サヤは青年の声を聞いて彼の目がその白いツバサから想像していた印象よりもだいぶん冷たい光をたたえていることに気づいて、様子も見ず声をかけたことを少しだけ後悔しました。

「ふーん、まあ別に何だっていいけどさ。この森は夜になるとオオカミが出るから気をつけた方がいいよ。」

青年はそう言った後、サヤの方を見ながら何か言葉を探しているようでしたが、やがてめんどくさそうに焚き火の方に目を移しました。

それきり2人の会話は途切れました。

サヤは自分がこんなわけのわからない世界に置き去りにされていることになんだか泣きたくなくなってきました。夜のしじまがやたらとうるさく、その無音に何だか腹が立ちました。やがて青年はサヤを無視するように再びひとりでハーモニカを吹き始めました。



「あの、ソーセージを…」

サヤの声は小さかったのですが青年はすぐにハーモニカを吹く手を止めました。

「私、お腹がペコペコなんです、そのソーセージ、分けてもらえませんか？それから今夜はこの焚き火のそばで寝かせて下さい。…行く場所がないんです。」

サヤは勇気を出してまくしたてるように言いました。

サヤは断られるかと思いましたが、青年はあっさり「いいよ」と言いました。

「いいよ、もうすぐ焼けると思うから、じゃあそこに座って待ってなよ。」

青年の目は相変わらず冷たく感情は読めないままでしたが、この人はいいい人なのか悪い人なのかよくわからない、サヤはそんなことを思いました。

その夜、2人はソーセージを分けて食べ、焚き火のそばで一緒に眠りました。眠る時、青年はサヤに毛布を貸してくれました。正直、サヤは青年のことが少し怖かったのですが、青年は始終サヤが居ても居なくても関係ないという風に振る舞っていたのでサヤも青年と同じように振る舞いました。

朝が来て目が覚めた時、サヤは自分が意外にもぐっすり眠っていたことに驚きました。青年はすでに起きて

いて荷物を片付けているさい中でした。

「これ、朝ゴハン。」

青年はぬるくなった苦いコーヒーと固いパンをくれました。

「あの、ココは何処ですか？」

固いパンをコーヒーに浸してやわらかくしながらサヤはずっと気になっていたことを青年にたずねました。

「アンドロメダからカシオペアへ抜ける街道の近くさ。」

サヤは半分「やっぱり」と思いながらもショックを受けました。

「…。アンドロメダって何ですか？」

サヤがやっと、そうたずねると青年は不思議そうにサヤを見ました。

「君は本当に何処から来たんだい？」

「サイタマケンです。ずっとサイタマケンのサカノウエ病院に入院してました。」

サヤは泣きたくなりながら答えました。

「ふーん。どういふことかはよく分からないけど君は僕の知らない国から来たみたいだね。」

「私、もう帰れないんですか？」

「さあ、僕にきかれても困るよ。」

サヤは何か言いたい気がしましたが、何を言っていない

のか分からず、黙々とまずい朝食を噛み締めました。青年も何か言いたそうでしたが、結局それきり何も言いませんでした。サヤが食べ終わると2人の間にまた幾度目かの石のような沈黙が訪れました。

「じゃあ、僕はもうそろそろ行くから。」

しばらくして沈黙に耐えかねたかのように青年が口を開きました。

「待って、もしよかったら私も連れて行ってもらえませんか？私これからどうしていいかわからなくて……」サヤは思わず大きな声を出してしまっていました。

青年はそれをきいて少し迷惑そうな顔をしましたが、やがて口を開きました。

「わかったよ。じゃあカシオペイアまで一緒に行こう。僕はその先のオリオンに用があるんだ。あ、カシオペイアもオリオンも街の名前だけだね。ついでにアンドロメダも街の名前さ。そこから先は自分で何とかしなよ。カシオペイアは大きな街だから君のいた国に帰る方法も見つかるかもしれないよ。」

「わかりました。」

サヤは見知らぬ街にひとり放り出されることを思うと少しゾツとしましたが、仕方ないのでそう答えました。サヤの暗い顔を見ると青年は言い訳するかのように言葉

を続けました。

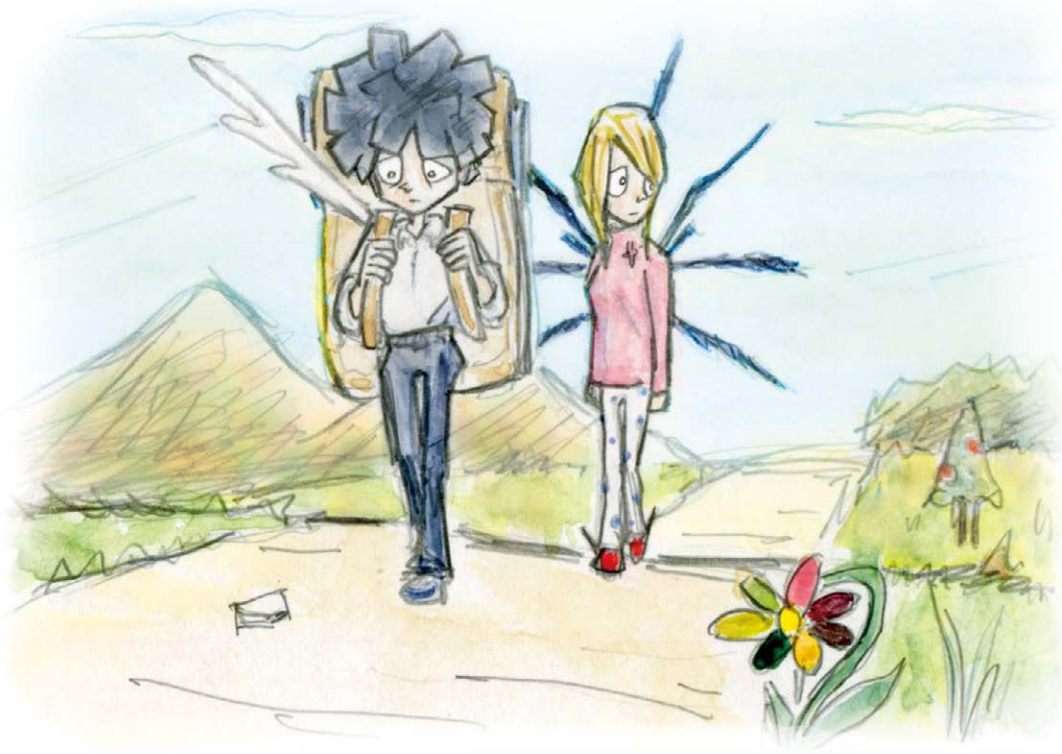
「まあ、君の大変さは僕にはわからないけどさ、深刻になりすぎると心に毒だよ。君の場合これ以上“ケガレ”ると“マゴコロの家”行きみたいだからね。そっちも気をつけなきゃ。」

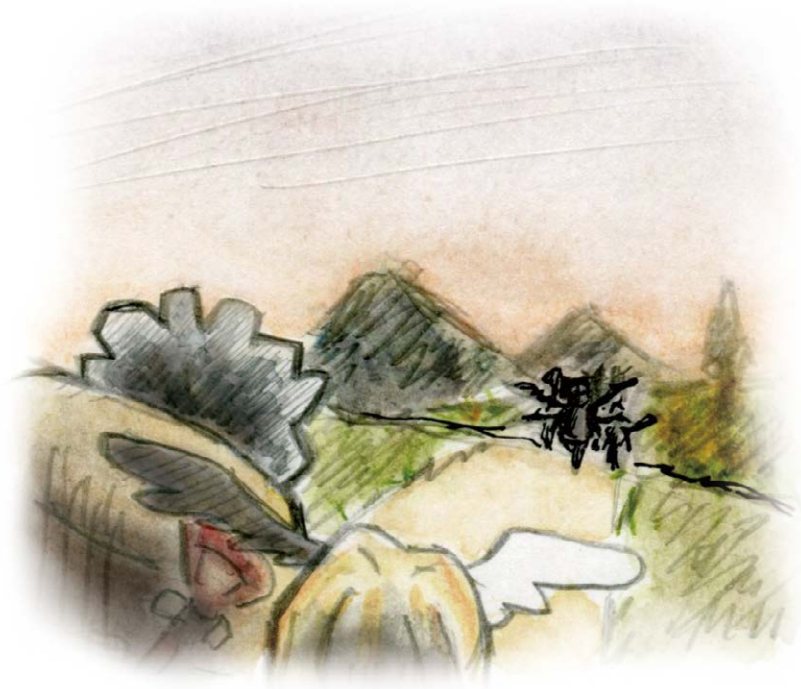
サヤが何のことかわからずきよんとしていると青年は少し自嘲気味に「確かに僕には心配する権利もないかもしれないけどさ」と言いました。サヤは青年の顔に浮かんだ歪んだ笑みが気になりましたが、あえて何もききませんでした。

2人は荷物を完全にたたみ終わると森を抜け、カシオペアへと続く街道へ出て、その道をまっすぐに進んで行きました。

白いツバサの青年は相変わらず無口でしたが、サヤはたとえ不愛想な青年がお供でもかろうじて独りぼっちをまぬがれているというだけでこの見知らぬ世界を歩く不安が少しはなぐさめられているような気がしていました。道の途中で、サヤが路傍に咲く見たことのない花に目を止め立ち止まっていると、傍まで引き返してきた青年が同じ花を見つめながら自分の名前は「タム」というのだ、とまるで脈絡のわからないタイミングで教えてくれました

た。サヤはその時、「この世界が何なのか？」をタムにあらたまってきいてみたいと思いました。何をどうたずねていいのかわからなかった。ききそびれたまま再び黙ってタムの半歩後ろをついていきました。





夕方くらいになって2人はその日初めて街道の反対側から人がやってくるのに出会いました。やってきたのはアンドロメダの方へ向かう行商人の一団のようで、その枚数はまちまちでしたが、彼らにもやっぱ黒い数枚のツバサが生えていました。

サヤは今度はツバサを見てももうあまり驚きませんでした。「どうやらこの世界の人間にはツバサがあることが当たり前みたいだ」、サヤは静かに心の中でそうひとりごちました。すれ違いざまに商隊の先頭を歩いていたりリーダーらしき太った男がサヤとタムをのぞき込んで珍しいものを見るような好奇の表情を浮かべましたがその男はやがてサヤの視線に気づくと何事もなかったかのような笑顔をつくつてサヤに会釈しました。

あまり感じのいい人達ではありませんでしたがすれ違った行商人達の中に1人も白いツバサを見なかったの
で、彼らが通り過ぎた後、サヤはツバサのことをきくいきっかけが出来たと思いました。けれど前を歩いていたタムに「白いツバサ、いなかったですね」と言ってみると、タムは急に歩みを止めて少し怯えたような目でサヤの方を見た後、抑揚の少ない声で「まあ、そうだろうね」と言っ
たつきり再び前を向いてズンズンと歩いて行つてしまつたのでサヤはやっぱりツバサが何なのかをきくことは出来ませんでした。

森を出てからちようど丸2日程歩いたことになる日の正午前頃、視界の果ての方に巨大な壁のようなものが見えてきました。サヤがタムに「あれ、何かしら?」ときくとタムは「この国の王様のトイレだよ」と答えました。驚

いたサヤが「この国の王様って巨人なの？」とたずねると
タムは「ごめん、ジョーダン。王様が住んでるのは本当だ
けどね」と気まずそうに笑いました。

それがカシオペイアの街の城壁でした。

城門をくぐって城壁の中に入ると、カシオペイアの街
はサヤが写真で見たことがあるような色々な外国の街を
出鱈目につなぎ合わせて豪快にひっくり返したかのよう
なヘンテコな風景を持つ街でした。



道端には様々な露店の人やその店をのぞく人、酔っ払いや物乞い達が雑多に混在していて、それらの無秩序が独特の包容力とせわしなさを撒き散らしながら奇妙なハーモニーを奏でています。サヤは何となくタムがこの街を「トイレ」と評した理由がわかる気がしました。サヤがそんなことを考えながら街の様子を観察していると、この街に入ってから黒いツバサを持つ人達に混じって幾人かのツバサのない人を見かけることに気がつきました。そのほとんどは子供でしたが中には大人も混じっています。ツバサのない人を見かけてからサヤの興味の焦点は再び「この街」から「この世界」や奇妙な霧状のツバサのことに移り変わっていききました。

「悪いけど、ココでお別れにしよう。」

タムが突然そう言った時、考え事の世界に入っていたサヤは一瞬彼が何のことを言ってるのか全くわかりませんでした。サヤがまじまじとタムの顔を見るとタムは続けました。

「僕はこれから色々と店をまわってオリオンへ向かう為の“山越え”の準備をしなくちゃいけない。君を付き合わせるわけにはいかないし、このへんで別れよう…。君は本当に大変な状況みたいだけど何の力にもなれなくてゴメン。この先の君の道に幸運があることを祈ってるよ。」

タムは少しぎこちない笑顔を浮かべると行ってしまうとしました。

サヤは思わずタムの手を掴みました。

タムは少し驚きましたがサヤもそんなことをした自分にびっくりしました。

二人の間に一瞬、繋がりとも隔たりとも片付けられない奇妙な“間”が生まれました。

サヤはとっさに自分のわがままな気持ちを誤魔化すかのように服のポケットをまさぐって森の泉で拾った綺麗なハートの石を取り出しました。

「ここまで本当にありがとうございました。何かお礼をしなきゃいけないって思うんですけど、私何も持つてなくて…。だから…コレ。」

サヤは早口でどう言おうとハートの石を握った手をタムの前に差し出しました。

手を差し出した瞬間、サヤはせっかく手を掴むまでしておいて素直に行かないでくれと言わない自分がとても見栄っ張りで愚かに思えました。

…タムは何も答えませんでした。

考えてみたらいくら綺麗とはいえお礼にただの石をあげますなんて幼稚っぽくて逆に失礼な思いつきだったかもしれない、サヤの頭をそんな考えがよぎった時、サヤは

サヤを見るタムの目が少し妙なことに気づきました。



タムはサヤの手の中にある石を凝視したまま、凍りついたような表情を浮かべていたのです。

彼は明らかに何かにひどく動揺している風に見えました。サヤが言葉をかけようとするとタムはサヤの顔に視線を移し、しばらくサヤをじっと見た後、まるで自分の中の何かを押しつぶそうとするかのような表情で言葉を搾り出しました。

「君は何を考えているんだい？ 君にはもう余裕はないだろ？ それにそもそも僕が救いを必要としない人間だということぐらい見ればわかるじゃないか。」

タムは怒っているかのようにすら見えました。サヤがタムの予想外のリアクションにまごついてしているとタムは

サヤの手から石をひったくるようにもぎ取って、それを
まるで自分の視界の外へ追放するかのように無理矢理に
サヤのポケットの中にねじ込みました。

「札なんていいよ。君ははやく自分を癒すことと元いた場
所に帰ることだけ考えな。…じゃあね。」

タムは行ってしまいました。サヤは今度は彼を引き止
めることが出来ませんでした。

…これからどうすればいいんだろう？

タムと別れた後、サヤはしばらく安心して道の真ん中
に立ちつくしていましたが、やがてギョツと目をつぶっ
て、「知ったことじゃないわよ」と小さくつぶやくとカシ
オペイアの街を人の流れに逆らって歩き始めました。ど
うしたらいいか考えようにも考える材料をほとんど持っ
てないのです。サヤは行くあてもなく見知らぬ街をあて
ずっぽうに進み続けました。

レビ川大通り。再誕記念広場。月光蝶の出会い屋。雁
作師専用手袋店。ゼンダ拷問術者組合。ハルクの博物屋。
ルルイエの革細工店。ヨダカ通り。エイエンの火時計屋。
螺旋詩塔。蒼空マーケット。カシオペイア中央大学舎。

ゲンジンテンジン古書店。

街の中にあふれる様々な言葉がサヤの心を通過して行きます（この世界で見かける文字は見たことがないものばかりだったのにサヤには何故かその意味がわかっているのです）。サヤは入院していた病院のあった街とこの街との接点を探そうとしましたが「やつぱりココは外国ですらない異世界の街らしい」という突飛な結論がいよいよ固まってしまっただけでした。

許されざる愛の館。鍵師ジョウの店。ガゼルの何でも屋。ユメボシ横丁。

サヤは「街の中心から外れる方向に入ってしまったな」と気づきましたが、半ば意地になっていたのでそのまま奥へ奥へと進み続けました。

こちら通行禁止。東城門方面。マゴコロの家。



サヤはふとその看板の前で立ち止まりました。『マゴコロの家』……。確か前にどこかで聞いたことがある名前だと思ったのです。そこは頑丈そうな柵で囲われた、白い大きな病院のようなビルの前でした。広くさびしい通りの一角で、今、その白いビルの前にはサヤ以外に人の姿はありません。

けど、何処できいたのだっけ、『マゴコロの家』？
サヤは思い出せませんでした。

サヤが白いビルを見つめていると、その閉めきられた窓の向こうから人の叫び声のような音がもれるのがきこえた気がしました。

何となく気味が悪くなったサヤが街の中央の方へ戻る

うと回れ右すると、ちょうど道の反対側から自転車に乗った少年がこちらへやって来るところでした。サヤは「おや？」と思いました。少年にはたくさんの黒いツバサが生えています。サヤはその時、街の中を歩いている時、ツバサのある子供をほとんど見かけなかったことに気づきました。

少年は白いビルの前で自転車を止めました。サヤが何となく立ち止まったまま見ていると彼はサヤの視線に気づくことなく「マゴコロの家」の前にあったベルを鳴らしました。しばらくするとビルの中から大柄な男が出てきて、柵を開き、感情のわからない表情で少年に何か告げると、少年は元気いっぱい大きな声で「お仕事お疲れ様、手紙を持ってきたんだ」と言いました。少年が何やら手紙の束のようなものを取り出して大柄な男に渡すと、それを受け取った男は少年の持っていた緑色の紙にサインしてビルの中に帰っていききました。男は去り際にチラリとサヤの方を見た気がしました。

サヤの中で白いビルに対する興味がぶり返してきました。

「ねえ、君、この中ってどうなってるの？」

サヤが帰ろうとしていた自転車の少年に声をかけると、少年はその声ではじめてそこにサヤがいたことに気づい

たようでした。

「どうって、まあ、俺も中に入ったことないからわかんないけど、多分、俺達とそんなに変わらない人達が暮らしてるだけだよ。外に出られないのはしょうがないのかもしれないけど「マゴコロの家」に入ってる人をそのことだけで差別するのは心の貧しい人のすることだってウチの母さんがよく言ってる。」

少年の口調から軽い敵意のような感情を感じたサヤは「違う、私、簡単に人を差別したりとかそんなことはしないわ、ただ中がどうなってるのか気になっただけよ」と釈明しました。少年はサヤの方をまっすぐに見ると「うん、そうだね。ネエちゃんは「ちゃんとわかってる」側の人間みたいだ」と不意打ちのように屈託のない笑みを見せました。他人のそんな表情が自分に向けられたことに面食らったサヤはききたかったことの答えが返ってこなかったことを忘れて破顔してしまいました。笑ったのは久しぶりでした。



「ねえ、君、さっき手紙を渡してたみたいだけどあの人は知り合いか何か？」

サヤは少年ともう少し会話を続けたくなくなってききました。

「うんう、もちろん違うよ、あの手紙は俺の書いた手紙じゃないし。俺は仕事で配達を頼まれてここに来ただけだからね。」

「え、君、まだそんなに若いのにもう働いてるの？」

サヤは驚きました。少年はどう見てもまだ12、3歳です。

「うちは父ちゃんがいらないし貧乏だからね。俺が働かなきゃどうしようもないんだ。」

それをきいてサヤは自分はお金も持っていないければ泊まる場所さえないことを思い出しました。

「ふーん、そうだ、君、よかったら私にも仕事を紹介してくれない？私、この街には居場所がないし、お金を全く持っていないの。」

サヤが頼むと少年は快く了承してくれました。

「ああ、いいぜ。俺は“何でも屋”に登録してるから元締めに頼んで仕事を分けてやることは出来るし、食費を払ってくれるんならメシ付きでウチん家に泊めてやることだって出来る。」

そして「うちは貧しいからタダでつてのはちよつと無理なんだけどな」と明るくおどけてつけ加えました。その

言い方があまりにさわやかだったのでサヤは思わず吹き出してしまいました。

「あ、俺の名前はグウエン。ネエちゃんは何て言うんだい？」

少年がたずねました。サヤが「サヤよ」と答えるとグウエンは「よろしくなサヤ」と言って右手を差し出しました。サヤはその手を握りながらタムがサヤのことをずっと「君」としか呼ばなかったことを思い出して何となく可笑しくなりました。



サヤはグウエンに連れられて裏街にある“何でも屋”のガゼルという人のところに行きました。ガゼルは引き締まった身体に1枚だけの黒いツバサを持った年齢不詳な男で25歳と言われても50歳と言われても通用しそうな掴みどころのない風貌をしていました。グウエンが「ガゼル、このネエちゃん、困ってるみたいなんだ。ウチの仕事を

回してやってくれないだろうか？」というときガゼルはサヤの方をチラリと一瞥した後、二つ返事で「おう、頑張んな、ウチの仕事は楽じゃないけどな」と黄色い歯を見せて無遠慮な優しさでサヤを迎えてくれました。それからグウエンは再び別の場所に荷物の配達に行くことになり、ガゼルのところに残ったサヤはガゼルに教えてもらいながら靴磨きの仕事の練習をしました。

夜になるとグウエンがその日分の賃金を取りに戻って来て、グウエンとサヤはそのまま自転車に二人乗りしてグウエンの家へと向かいました。

サヤが荷台の上でバランスをとるコツを掴んだ頃、グウエンが自転車をこぎながらサヤに「寒くないかい？」とききました。サヤが「大丈夫よ」と答えるとグウエンは「そりゃよかった。今日は風が強いからな。帰ったらあったかいスープが飲みたいよ」と言って大きくしゃみをしました。サヤが笑いながら「グウエンこそ大丈夫なの？」ときくとグウエンはもう一度くしゃみをして「サヤが後ろに乗ってりや何でも来いだよ」とはしゃぎながら自転車のスピードを上げました。それから「本当はうちも余裕があるわけじゃないから何も持っていない友達を食事に招いたりすることは出来ないんだけどさ、サヤは困ってるみたいだし俺の好みのタイプだから今日だけは特別大サービ

スだぜ」と嬉しそうに言いました。サヤは一瞬、タムが受け取らなかったポケットの中の光る石をお金の代わりにグウエンにプレゼントしようかと迷いましたが、グウエンは綺麗なものだけの石コロよりもお金の方を喜ぶ人間だと思ったので、お金が出来てからちゃんとグウエンに相応の金額を支払おうと心に決め、「光栄だわ、ありがと」とだけ答えました。

見知らぬ世界で不安は消えないけどこの時間を忘れたくない、サヤは錆だらけの自転車の荷台でこの世界に来てから何度目かのピンク色の月に照らされながらそんなことを思いました。





グウエンの家はガゼルの店から自転車で10分程走ったところにある、あまり上品でない店々が立ち並ぶ地区の一画にありました。正直なところ家と呼ぶよりは屋根裏と呼ぶ方が的確なカンジで、サヤは最初、グウエンが“夢売り屋”と書かれた剥がれかけの看板の前に自転車を停め「ここの2階なんだ」と言った時、自分は騙されてるんじゃないかと思ってしまった程でした。歩くと床の軋む狭い家でしたが、グウエンがサヤを紹介するとグウエンの母クロエは嫌な顔もせず「何もない家だしあんたに特別な気づかいをしてやる余裕もないけど、自分の家だと思ってくれていいわよ。困った時に堂々と助けを求める強さをなくしたら女の口は干物同然だからね。」と、よくわからないことを言って歓迎してくれました。グウエンには9枚のツバサがありました。クロエにも4枚の黒いツバサが生えていました。



夕食はクロエが外で買ってきた変わった味の肉を挟んだパンと薄いシチューのような味のする紫色のスープでした。

食事の時、サヤが半分無駄だとは思いつながらも「サイタマケンのある二ホンという場所のことを知りませんか？」とクロエにきいてみると、「さあ、きいたことがないわ、主人が生きてたら外国の話は詳しかったんだけどね」という答えが返ってきて、「一体その場所は何なんだい？」とたずねられました。

「…いえ、理由はまだ話せないんですけど、私、どうしてもその場所に行かなきゃいけないんです。」サヤは少し歯切れ悪く答えました。

サヤはクロエやグウエンを信用出来ない人間だとは全く思いませんでしたが、逆に自分が頭のおかしな信用出来ない人間だと思われることが怖かったので自分がサイタマの病院からタムと出会った森にワープしてきたらしいことは伏せておくことにしました。同様の理由で自分も含めこの世界のほとんどの人間に生えているツバサのこともきかずに、とりあえず会話の断片から知るチャンスをつうかがうにとどめておくことにしていました。

「パイ婆さんなら何か知ってるんじゃないかな？」

口の中でパンを噛みながらグウエンが言いました。サヤがグウエンの方を向くとグウエンは続けました。

「実は俺、ちょうど昨日、婆さんに相談したいことがあって星屑亭に行ったんだけど、そしたら婆さん、今日、俺が配達の仕事を選ぶようにしたら道が開けるかもしれないって言ったんだ。配達は“何でも屋”で俺が出来る仕事の中じゃ身入りが少ない方だろ？正直、俺は嫌だったけど、言う通りにしてみたら、そしたら今日サヤに会った。ただの偶然かもしれないけど婆さん流に言やあ、大きな流れの結び目がこの出会いにあるってこともかもしれない。」

「グウエン、どういうこと？パイ婆さんってのは誰？」

「飲んだくれの占い師よ。」

サヤがグウエンにたずねると代わりにクロエが答えました。サヤは心なしかクロエの声が不機嫌になっているように感じました。

「グウエン、あの店は酒場よ。行く時は独りで行かないようにっていつも言ってるじゃない。あなた母さんとの約束を破ったのね。」

「だって、母さんにきかれたくない相談がある場合はどうすりゃいいんだよ？」グウエンは反抗しました。

「相談ってどうせ自分の“ケガレ”のことだろ、私と一緒に行って何の不都合があるってんだい。」

クロエは小言を言うような口調でグウエンに向かってそう言いましたがクロエの言葉をきいたとたんグウエンはサヤの方をうかがいました。サヤが不思議そうな顔を

するとグウエンは母親に対して強く言葉を返しました。

「よく『どうせ』なんて言えるな、サヤの前だぞ！」

クロエは少しはつとしてサヤの方をちらつと見ると「ごめんなさい」とつぶやくように謝り、以後はその話題を続けようとはしませんでした。サヤはそのやりとりの意味はわかりませんでした。が反射的に「いえ、私は大丈夫ですよ」と笑顔をつくって答えました。グウエンはその場の空気の中に置き去りにされた何かを誤魔化そうとするかのように言葉を続けました。

「ごめんな。…ああ、パイ婆さんってのは星屑亭って酒場の女主人なんだ。けど占いの素養もあるから頼めば相手を選ぶけど占ってくれる。占いの腕については色んなことを言う人がいるけど俺は婆さんの腕は確かだと思ってるんだ。当たらないって言ってる奴らはきつと婆さんの言葉を受け取るだけの心の器がないのさ。もちろん金も取るしヘンクツな婆さんだけだね。一応、物知りな人だし、サヤも一度行ってパイ婆さんに占ってもらうってのはどうかかな？」

そうして、少し言いにくそうに「サヤは二ホンに行かないといけない以外に色々大変なことも抱えてるみたいだし…」と付け加えました。

「ちようど明日の午後だったら私は何も用事がないわ。サヤさえ良ければ連れて行くわよ。」クロエが言いました。

サヤは占いは結構好きでしたが、別に「信じている」という程ではなかったし、元の世界でも「占い師」と呼ばれる人の元を訪れようと思ったことなどありませんでした。けれど今はこのわけのわからない世界で少しでもすぎるものが欲しいのも確かでした。

「本当にありがたいし、行ってみたいんだけど…。」

サヤは口ごもりました。

「けど…私…、お金を持ってないわ。」

それをきくとグウエンが「お金なら…」と口走りましたが、そこまで言った後、クロエの顔をうかがって黙りました。少しの沈黙があり、それからしばらくして、グウエンがまた口を開きました。

「わかった。じゃあ明日は朝からガゼルのところに行つて今日教わった靴磨きの仕事をもらえばいいよ。午前中いっぱい働けばそれでだいたいパイ婆さんに占ってもらえるだけのお金がつくれるはずさ。その後、その金で母さんと一緒に星屑亭に行けばいい。」

「だったら朝からグウエンと一緒に靴磨きに行つて昼過ぎにココで私と落ち合うつてことでどうかしら？」グウエンの意見にクロエも賛同しました。

サヤは占いにはそれ程乗り気なわけではなかったし、やったことのない靴磨きの仕事でちゃんとお客がとれる

かが不安でしたが、グウエンと一緒にならきつと何とかなるような気がしたので、少し緊張しながら「はい、じゃあそうします」と答えました。

「よし、決まりだ。」

グウエンの年相応の子供っぽい笑みがサヤの脳裡に残りました。

翌朝、サヤは少しソワソワしながら目を覚ましました。薄い布団にくるまったまま目を開けてこれからの一日のことを考えると胸の中をとらえどころのない不安と浅はかな期待が行ったり来たりしました。けれど朝食の食卓についた時、サヤの心の中はソワソワどころではなくなっていました。グウエンが急に熱を出して今日サヤと一緒に仕事に行くことが出来なくなってしまったのです。「ごめん、サヤ。今日はサヤの初めての仕事の日だったのに、俺、どうしようもないや…。」

グウエンは少しフラフラしながら済まなそうにサヤに謝りました。

結局、サヤはその日の午前中は独りきりで靴磨きの仕事に行くことになりました。

そして一度も客をつかまえることが出来ないまま、つまり全く稼げないまままで昼の南中時刻を迎えることに

なってしまったのでした。



サヤはクロエに事情を説明して今日は占いに行くのはやめるしかないなと思いましたが、家に戻ってみるとやっぱりグウエンがいる前では客が取れなかったなどと言うことは出来ず、気づくとお金もないのにクロエと共に星屑亭に向かって出発してしまっていました。

どうしよう、このままじゃ私、本当にサイアクの人間だ。

サヤは道中何度もお金のことを打ち明けようとしたがタイミングが掴めず、そうこうしているうちに2人はそのまま星屑亭に着いてしまいました。

サヤは罪悪感を通りこして自分勝手に腹をくくりました。

「まあ、なるようになるわよ。そもそもこれ以上のサイアクなんて考えるのも難しいじゃない。」



星屑亭はひと言で表すと“物置きのような店”でした。

埃っぽい店内には壁が何処にも見当たらない程、色々なガラクタが積み上がっていて、いくつかのテーブルや椅子がその隙間に放置されたように置いてありました。場所が路地裏のわかりにくい場所にあるせいなのか訪れた時間帯のせいなのかサヤとクロエが店に入った時、店内には店主のパイと思しき老女以外には誰もいませんでした。



老女はよく目立つ大きな目と5枚の黒いツバサを持つ少し小太りなびっこで、クロエが挨拶代わりに「相変わらずさびれてるわね」と毒づく。「余計なお世話さ、昼間から酒場に来ようって馬鹿の方が珍しいのよ。ところであんた、その不似合いなネックレスはどっから盗んだんだい？」と言って洗面台に痰を吐き捨てました。

「人聞きの悪いこと言わないで。昔、主人からもらったものよ、今日は若いコと一緒にだから少しめかしこんでみたの。」

クロエが答えると老女は興味なさそうに「フン」と鼻をならし足を引きずってサヤとクロエの方に近づいてきました。

クロエがサヤに「この人がパイよ」と紹介すると、その女、パイは「そんなこたあどうでもいいわ、それであんたら、何を飲むんだい？」とサヤ達にきいてきました。

「パイ、今日は飲みにきたんじゃないわ、このコ、サヤっていうんだけど、このコをちょっと占ってやって欲しいの。」

クロエが言うとパイはギョロつとした大きな目でサヤの方をしばらくじっと見ました。

「ふーん、で、金はあるんだろうね。」

パイが言うとクロエはサヤの方を見ました。サヤは心臓がバクバクいうのを我慢しながらまっすぐな視線でパイの皺だらけの顔を見ました。

「ごめんなさい、お金はありません。」

それをきくとクロエが驚いた顔をしましたがサヤは構わず言葉を続けました。

「ごめんなさい、今日の午前中に靴磨きをしてお金をつくるはずだったんですが、お客がとれなかったんです。けど、お金の代わりにコレで占ってもらうことは出来ないですか？」

サヤはそう言うお店に入った時から頭の中で何度か練習していた通りに服のポケットから緑色に光るハート型の石を取り出してそれをそばにあった机の上に置きました。サヤは自分のしている行動に内心ビクついていましたが、それを悟られないようにパイの顔をまっすぐに見続けました。



パイは石を見るとわずかに眉を動かした後、顔色を変えずサヤの顔をじつと見つめました。

「…おもしろいね、嬢ちゃん。あんたなかなか変わった“流れ”に運ばれてココにやって来たみたいじゃないか。けどこれはあんた以外の人間にとっちゃ持っていてても無意味なモンなんだよ。私は卑しさの染み付いた人間だけでもそれにしたって受け取れやしな…」

パイがそこまで言った時、クロエが自分の目の前の光景が信じられないというような表情で石を掴むとサヤに言いました。

「どういうことよ、サヤ！これを持ってるなら何であんたは…っ」

「黙りな、クロエ。このコは何も…」

パイはそこまで言うとかかに気づいたような表情になり、やがてサヤとクロエを交互に見ると少しやるせなさそうに微笑みました。「そうか、おととい感じたのはこのことだったんだね。」

サヤは混乱していました。

何なんだろう、この反応？この石、ただの綺麗なだけの石じゃないのかもしれない。タムの時といい、私、偶然、何かとんでもないものを拾ってしまったんじゃないだろうか…。

そんなことを考えているとパイがサヤの方に向き直りました。

「わかったわ、嬢ちゃん。じゃあ今回は特別にその石を対価にあんたのことを占ったげるよ。けど、言つとくが決して私は善人じゃないからね。」

それをきくとクロエが上ずった声で「パイ、あんた何を考えて…」と言いました。

「駄目だよ、クロエ、その石から手を離しな。それはもう私のモンだ。そんなに欲しけりゃ私から『買い取る』ことだね。」

パイはそう言うのと威圧とも憐憫ともとれない鋭く真剣な眼光でクロエを睨みつけました。

「わかったわ。」しばらく間があった後、クロエはそう言うのとまだ少し困惑した様子を残したまま石を机の上に戻しました。サヤは急に不安になってきましたがもう引き返せませんでした。

「さて嬢ちゃん、それじゃあんたのことをもつと奥まで見せてもらおうか。」

パイはそう言うのとズカズカとサヤに近寄り、自分の額をサヤの額に押し付けて目を閉じました。サヤは少しびっくりましたが動揺する気持ちを抑えて、彼女の体臭を鼻の先で感じながら黙っていました。

「ふーん、大方は見たまんまだわね。」

しばらくするとパイはそう言つてサヤの額から自分の頭を離しました。サヤは注意深く次の言葉を待ちました。「とうかあんたを運んできた“流れ”が特殊すぎて私の器じゃ読みきれないってのが本音なんだけどさ。私もそこそ長く生きてるつもりだけど、他人をのぞき見てこんな不思議なカンジがするのは初めてだよ。ただ、これだけは言えるね、あんたは自分をこの世界に迷い込んだ被害者みたく思つてるかもしれないけどあんたは自分の意志でこの世界に同調してきたんだ。多少語弊はあるけどあんたの視点に立てば、『あんた自身の心がこの世界を創った』とだつて言えるかもしれない。」

私がこの世界を創った？……サヤはいきなり固いもので頭を殴られたような気がしました。

けど、この老女は確かにサヤを「この世界に迷い込んだ被害者」とも言つたのです、…どうしてかはわからないけど、この人には確かに本当に何かが見えてるんだ、とサヤは思いました。

「ムズかしい話はいいです。とにかく元の世界に帰る方法を教えて下さい。」サヤは反射的にそう言いました。

「さつきから2人で何の話をしているの？『世界を創った』とか『元の世界』とかって……。」クロエが更に困惑した様子で話に割り込んできました。

「教えてやるよ、クロエ。」パイは目だけでクロエの方を一瞥すると言いました。

「この嬢ちゃんは何い」のない別の世界からこの世界にやってきたんだ。そしてこの世界で黒いツバサに初めて出会った、違うかい？」

「そうです、けど1人だけだけど白いツバサの人にも会いました。そう、このツバサ…、このツバサは一体何なんですか？」サヤはずっと疑問だったことを初めて口に出しました。その時クロエのサヤを見る視線が張りつめたものに変わったような気がしました。

「…あんたが元の世界に戻る方法のことだけだね、—。」

しばらく黙った後、パイは意図的に1つ前のサヤの質問を無視したように口を開きました。

「簡単に言うけど『自分がこの世界に来た理由』を思い出すことさ。」

サヤはパイが何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。それにツバサに関する質問を無視されたのも何だか釈然としません。サヤがパイに何かを言い返そうとするとそれを許さないタイミングでパイは言葉を繋ぎました。

「『あんたは自分の意志でこの世界に同調してきたんだ』そう言ったね。その時に何か願ったことがあるはずさ。」

この世界でその願いを思い出せばあんたは元居た場所に帰ることが出来る。あんたにとってこの世界はその為に用意された命懸けの夢みたいなものだからね。」

サヤは反感を覚えながらも、思い出せていないままの病院での神サマに対する祈りのことを考えました。

「あんたが何を願ったのかは残念ながら私には見えないから教えてやることあ出来やしない。けどそれを思い出す為のしるべのようなものはぼんやりと見えたから言っておくよ。『この呪われた世界で信頼出来るモノを探すこと』さ。おそらくそのしるべがあんたを出口の方に導いてくれる。あんたが『時間内に』その出口を無事抜けられるかどうかは私にとっちゃ知ったこっちゃないがね。」

サヤは「信頼出来るモノ」と言われて何となくグウエンの笑顔を思い出しました。

「悪いけどツバサの話は…」

パイがそう言いかけた時、店の入口の方で音がしました。パイが言葉を止めてそちらの方を見たのと同時に夕方前の星屑亭を訪れた客らしき男が「はじめまして、お邪魔します」と言った声が聞こえました。サヤは一瞬遅れてその声に聞き覚えがあることに気づいて急いで入口の方を振り向きました。

「タム！」

「あ、君…、何で？」

なんと店に入ってきたのは昨日まで一緒にいたタム
だったのです。



タムはしばらくこの不思議な偶然に驚いていましたが、少しあたりを見まわした後、言いました。

「ああ、君も誰かから占いの噂をきいてきたんだね。びっくりした……。けど、君、まだ「アイス」を使っていないみたいじゃないか。どうしてだい？ はやくしないと本当に手遅れになってしまうよ。」

「アイスを使う？」サヤはきき返しました。

「え？」タムが言うと、クロエが突然自分のつけていたネックレスを力任せにはずして机の上に置きました。

「パイ、この石、このネックレスで私に売ってちょうだい。」クロエは怖い顔で机の上にあったハート型の石を乱暴に掴むとパイに言いました。クロエはものすごく何かに焦っているようでした。

「売る？ それはそのコじゃないのかい？」

タムは怪訝な顔で言いました。

パイは黙って机の上のネックレスを取るとクロエの方を見てうなずきました。

次の瞬間ハート型の石を手を持ったクロエは、タムを突き飛ばすとサヤの手を取って店の入口の方に駆け出しました。後ろでタムのうめくような声と、星屑亭の壁ぎわに積み上がっていたガラクタ達が落下する音がしましたがクロエは止まりませんでした。サヤは何が起こったかわからないまま、クロエにひっぱられるままに走って

しまっていました。



クロエはサヤの手をしっかりと掴んだまま星屑亭のある路地裏を出て、街の大通りを小走りで駆けていきます。「どうしたの、クロエ、痛いわ！」サヤは戸惑いながら叫びましたがクロエは振り向いてさえくれませんでした。サヤはタムが積み上がっていたガラクタの下敷きにならなかったか心配だったし、ハート型の石を見てからのクロエの態度に胸騒ぎのようなものを覚えていましたが、クロエがサヤの手を離さず止まってもくれなかったので何度もうつまずきかけながら彼女の後をついていきました。



たどり着いたのはクロエとグウエンの自宅でした。

家の前まで来た時、サヤが「どうして家に帰るだけにこんな強引なやり方が必要だったの？」と言うと、クロエはその質問に答えないままやっとサヤの方をふり返って言いました。

「お願い、グウエンを助けてちょうだい。これはあなたにしか頼めないことなの。」



クロエの顔はひきつっていましたが、その目は真剣そのものでした。

一体何がおこったというのだろう？ 助ける？ グウエンはただの風邪だったはずでしょ。それに私にしか頼めないなんて……。

サヤの頭の中でタムの顔とパイに言われた言葉、得体の知れないハート型の石のことが1度ずつ浮かんでは消えましたが、どうしてもクロエが嘘をついているように思えなかったので、サヤは小さな声で「わかったわ」と答えました。

家の中に入るとグウエンはベッドで寝息をたてていました。クロエはため息をついて「ちょうど良かったわ」とつぶやくとベッドの横に椅子を持ってきてサヤにそこに座るように言いました。サヤが椅子に座るとクロエはすぐにサヤに何かを言いかけてましたが思い直したように口をつぐみました。その後、クロエはじつと黙ってサヤを見つめ続けました。

「どうすればいいの？」しびれをきらしてサヤがきくとクロエは少し疲れた目をして「そうね」と言いました。

「…そうね、少しお話をしましょ。」クロエはもう一脚椅子を持ってくるとサヤの椅子の横に置いて自分でそこに座りました。



「『愛す』ってどういうことだと思う？」

椅子に座るとクロエは突然サヤに妙なことをきいてきました。

「すごく大切にしてみたいな意味なんじゃないですか。」
サヤは答えました。

「けど、その質問とグウエンを助けることと何か関係があるんですか？」

「多分ないわね、私のわがままよ。けど、さっき、あなたの顔を見てたら何となく心にその質問が浮かんのだの。」

クロエはサヤの顔をずっと見ていました。サヤは戸惑いながらも目をそらしませんでした。

「大切な人が死にかけていて自分が代わりに死ねばその人が助かるのだとするわ。その時に自分から進んで死のうとするのは愛かしら？」クロエはだしぬけにきいてきました。

「…わかりません。立派なことだとは思いますが。」

「本当に？じゃあ大切な人が死にかけていて自分でもその人でもない第三者が代わりに死ねば助かるって場合は？その第三者に死んで欲しいと思うことは愛？」

サヤは何も答えませんでした。クロエが何を言いたいのかわかりませんでした。

「私ね、両方とも愛じゃないと思うわ。」

クロエは消えそうな声で言いました。そして星屑亭で

のやりとりで『パイから買い取った』ハート型の石を取り出すとそれを静かにサヤの手に押し付けました。

「これをにぎったままグウエンに触れて『私はグウエンを愛す』と言ってちょうだい。そしたらこのコは助かるから。」

サヤはいぶかしみました。自分は何か得体の知れないものに巻き込まれそうになっている、今のクロエは何かおかしい、自分の直感が確かにそう告げています。けれど、クロエが「グウエンを助けて」と言った時のあの眼差しは確かに『ほんとう』だったともその直感は言っているのです。

「……………」

サヤはそっとグウエンの額に触れてみました。そして目をつむるとクロエの言葉を丁寧になぞりました。

「私はグウエンを愛す。」



サヤがその言葉を発したとたん手の中の石が光を増し、ものすごい量の光を発したまま膨れ上がったかと思うと、突然、手の中から消えました。

それはほんの数秒のことだったのでサヤはあつけにとられてほとんど何が起こったのかわかりませんでした。

「ありがとう。これでグウエンは助かったわ。」

クロエのその言葉でサヤは我に返りました。サヤがグウエンの方を見るとグウエンに生えていた黒いツバサがきれいさっぱりと消え失せています。



もしかしたらこれが今の光の効果だったのかもしれない、サヤは気づきました。

「助かった？助かったって黒いツバサがなくなったことですか？…それだけ？それだけの為にあんなに大騒ぎしてたんですか？どういうこと？このツバサは一体何なの？」

クロエは何も答えず部屋の隅にあった戸棚の方に歩いていくと、その奥から小さな箱を取り出してきてそれをサヤに渡しました。

「私達の貯めてた貯金の全部よ。これを持ってこの家から出て行ってちょうだい。私はあなたに対してものすごく残酷な仕打ちをしたの。とても許してもらえないことではないし、許して欲しいとも思わないわ。」

サヤがあまりのことに反応出来ずにいると、クロエが怒鳴りました。

「はやく！はやくココから出て行って！」

サヤは現実感のないまま階段をつたってグウエン達の家の前道路に降りました。

サヤは自分の身に何が起こったのかほとんど理解出来ていませんでしたが、昨日、グウエンの家に入った時、クロエが「困った時に堂々と助けを求める強さをなくしたら女の口は干物同然だから」と言ってくれたことを思い出すと何となく涙が出てきました。

信用出来そうな人達が見つかったと思ってたのに……。優しそうな人だと思ってたのに……。

私は多分あのオバさんに騙されたような気がする。けど何を失ったかすらもわからない。けど、お金を渡されて出て行けなんて悲しすぎる。まるでテレビドラマの主人公みたいじゃない。もう嫌だ。帰りたい。本当に帰りたい。わけがわからない。

この呪われた世界で信頼出来るモノを探せ？この世界は私が創った？フザケないでよ。…………。

どうすればいいのよ。



「サヤ。」

サヤが“夢売り屋”の看板の前に座りこんで泣いていると誰かに声をかけられました。

サヤが涙目のまま顔を上げるとそこにはタムが立っていました。



タムはサヤの顔を見ると同情するように無理矢理笑顔をつくりました。

「大丈夫かい？」

「大丈夫なわけじゃない！……一体何なのよ、このツバサ!? 何なのよこの世界!」サヤはわめきました。

「…あのバアさんから色々きかされたよ。ここの場所も教えてもらったんだ。半信半疑だったけど残念ながらみんな本当だったみたいだね。」

サヤはタムの顔を見ました。

「そのツバサのこと、ききたいかい？ある部分ではもう手遅れな説明でもあるけど。」

サヤは手で涙を拭きながらうなずきました。

「君にとっては少し残酷な話になるよ。」

何処か遠くの方で鐘の鳴る音がきこえました。時刻はもう夕方でした。

「…この世界には誰も思い出せないくらい昔から恐ろしい
“呪い”がかかってるんだ。」そう言ってタムは話し始めま
した。

「その呪いは“ケガレ”って呼ばれてる。“ケガレ”は心を麻
痺させる呪いだ。この世界では、ほとんどの人はただ生き
てるっただけでその呪いに心を侵されていくようになって
るんだ。

『麻痺させる』って言っても“ケガレ”が心の表面に食い
込んでる程度じゃ、心の働きに特に大きな影響は出ない。
けど、“ケガレ”の深度が深くなり心の核が破られてしま
うと、そうはいかない。そうなった人は“ケガラワシキ”っ
ていう理性を持たないバケモノになってしまうんだ。

“ケガラワシキ”は黒い霧でできた異形の身体をしてい
てもう人の形も心もとどめていない。人ではない、危険な
鬼だ。

……だから“ケガラワシキ”になってしまったモノはみ
んなで殺さなきゃいけない。」



タムは「殺さなきゃいけない」という言葉を言う時、サヤから目をそらしました。

サヤは突然のタムの話にびっくりしました。シヨックでうまく言葉が出ませんでした何がシヨックかよくわかりませんでした。

タムは話を続けました。

「そしてここからがその黒いツバサの話だ。『ケガレ』は人の心に巢喰うムナシサを食べて徐々にそこに食い込んでいくって言われてるけど、そのへんはあんまりはつきりわかっていない。けどこの食い込む速度、つまり『ケガレ』が人の心を侵していく進行速度にはとにかくものすごく個人差があるんだ。『個人差』って言ったけどこれはかなりはつきりした形で目に見える。それが君にも生えてるその黒いツバサさ。黒いツバサは心の芯に『ケガレ』が近づいていく時、それが一定深度を超える度に身体の内から1枚ずつ生えてくるものなんだ。」

サヤは息を飲みました。気づくと涙は止まっていて、泣いていたのが遠い昔のことのように感じられました。

「ツバサの上限は12枚だ。…それ以上はない。12枚の黒いツバサが生え揃った状態で更に呪いが進行していくと、…次は『ケガラワシキ』、異形の鬼だ。」

タムはサヤの顔を見ないままそう言うと、サヤがその

言葉の意味を受け取る間が空いてしまうことを恐るのかのように次の言葉を続けました。

「ケガレ」はどうやっても進行していく。その進行自体を止める手立てはない。けど、この世界にはたった1つだけ心に食い込んだ「ケガレ」を癒すことの出来る奇跡の魔法が存在するんだ。それが奇跡の石、「アイス」の魔法さ。多分、君がさつき使わされてしまったあのハート型の石のことだよ。



「アイス」は意志のある石と言われていて自分から主人を選んで、ある時、突然にその人の元に現れる。そしてその「アイス」を授かった者が被術者に触れながら『私は○
○（↑被術者の名前が入る）を愛す』という言葉を唱えることで被術者の「ケガレ」を完全に癒すんだ。「ケガレ」を

癒すっていうのはわかりやすく言うと黒いツバサの枚数をいったんゼロに戻すってことだよ。もちろんその後も“ケガレ”は進行するから2度とツバサが生えなくなるわけじゃないけどね。

“アイス”には他にも細かい特徴がいくつかある。挙げてみるなら、

- ① “アイス”はその“アイス”に選ばれた者（その“アイス”を見つけた者）本人しか使うことが出来ない。
- ② “アイス”は基本的には誰に対しても使うことが出来る（もちろん自分に対しても）が、“ケガラワシキ”になつてしまった者を癒すことは出来ない。
- ③ “アイス”の消費期限はその人が“アイス”に選ばれてから（“アイス”を見つけてから）約7日間。それを超えると“アイス”は魔法の光を失ってただの石になる。
- ④ “アイス”は心の何処かでそれを強く必要としている者の元に現れる。

——、つてとこかな。」

長い沈黙がありました。サヤは「ツバサの上限が12枚」という言葉が強烈すぎて“アイス”の話があまり頭に入ってきてませんでした在必死で話を反芻しようと頑張っていました。

「助からない人は…、誰からでも“アイス”を使ってもらえずにその“ケガラワシキ”になってしまふ人は一体どのくらいいるの？」やがてサヤは恐る恐るききました。

タムはどう説明していいのか迷っているような表情をした後、「わからないけど多分ものすごくいっぱい」と言いました。

「正確には僕もわからない。けど“アイス”がものすごく貴重なものだっていうことは確かだから。」

何ということだろう…。サヤのツバサはもう11枚です。サヤはパイが元の世界に戻る方法を説明してくれた時『時間内に』出口を抜けられるかどうかは知ったことじゃないと言っていたのを思い出しました。パイは多分、クロエがサヤに“アイス”を使わせようとすることを知っていたのです。

…もしあれを自分の為に使っていれば―。

サヤは複雑な気持ちになりました。

「ああ、そうだ。もう1つ説明しとかなきゃいけないことがあった。」タムが言いました。

「君のツバサは今11枚だけど、その枚数はこの社会では人が自由に生活出来るままで持てるツバサの枚数の限界だから。」

「どういうこと？さっき12枚が限界って言ったじゃない？」

サヤはもう何が何だかわかりませんでした。

「自然の状態ではね。けど僕らの社会には街の中に“ケガラワシキ”が突然現れてしまうことを防ぐ為の法律があるんだ。“マゴコロ保護法”って言ってね、黒いツバサが12枚生え揃ってしまった者は強制的に“マゴコロの家”って呼ばれるビルに閉じ込められることになってるんだ。そしてそこに入らざるを得なくなった人達は以後は近親者が自分に対して“アイス”を使ってくれるか、“ケガラワシキ”になって殺されるまでの時間をその中で過ごさなきゃいけない。たまにそこに収容されている自分とは無関係の人達に対して“アイス”を使ってくれに来る聖人みたいな人もいるんだけど、……やっぱりそんなことは滅多にないからね。」

サヤは昨日、グウエンと出会った白いビルのことを思い出しました。自分の中にぽっかりと空いた穴を誰のせいにしたらいいのかわかりませんでした。タムはとも気まずそうに下を向いてサヤと目を合わせようとしませんでした。

「…私に次のツバサが生えるまで後どれくらいあるの？」

サヤは自分の中に生まれた得体の知れない恐怖を整理するかのようになぞねました。

「わからないよ。本当に人によってその速度は全く違うから…。」

「タムはどうなの？タムには白いツバサが生えてるけどそれも“ケガレ”の呪いなの？私、この世界に来てからタム以外に白いツバサの人は見なかったわ。」

それをきくとタムはまたいつかのように怯えたような目でサヤを見て、ぼそりと「いや、これは違う」と言いました。

「…僕は“ハクバネ”って言ってね、ものすごく希少な確率で産まれる、“ケガレ”に全く侵されることのない“呪い”に耐性のある人間なんだ。」

気づくと西の空が残酷な程鮮やかな色に染まっていた。ちようど夕方と夜の境目でした。



タムは唐突に「ゴメン」と言いました。

「何であやまるの？」サヤはその理由がわからないフリを
して言いました。

「お人好しだね、君は。」タムは苦笑しました。

「タムだってそこそこお人好しじゃない。最初は冷たい人
かと思ったけど、私のこと、わざわざ探しに来てくれた
んでしょ？」

「まあ、だって何も知らない君をこの街に放り出したのは
僕だし、君があの子の人に騙されて“アイス”を使わされ
てしまう前に追いつけるんなら追いついて止めるべきだ
と思ったからね。：あのお婆さんは僕が間に合わないつ
てわかってたから僕に色々教えたんだと思うけど。：やつ
ぱり僕はお人好しとは違うよ。」

「ふーん。」

また2人の間に沈黙が訪れましたが、それはそんなに
冷たいものでもありませんでした。

「…あ、そう言えば覚えてたんだね、私の名前。」

サヤはふと思いついて言いました。

「名前？」

「だってさっき私のこと『サヤ』って呼んだじゃない。ずつ
と『君』、『君』って呼ばれるから忘れられてるのかと思っ
てた。」

サヤが苦笑しながら言うのとタムも恥ずかしそうに笑い
ました。

「ねえ、タムはこれからどうするの？」

「どうって？」

「私をこの街で置いてきぼりにしたことを本当に反省して
るんだったら今からタムの旅に私をまた一緒に連れてつ
てよ。」

サヤはそう言いながら何となく『この呪われた世界で
信頼出来るものをみつけること』が元の世界へ帰る為のし
るべだ』というパイの言葉を思い出していました。

タムは少し驚いた顔をした後、また気まずそうな態度
に戻って言いました。

「正直に白状するけど僕の旅の目的は“アイス”を手に入
れることなんだ。で、…言いにくいけど、もし仮にこの
旅が成功して僕が“アイス”を手に入れることが出来たと
しても僕は、その“アイス”を、君には…、サヤには使わ
ないよ。それでいいんなら、まあ…。」

サヤは少し傷つきましたが強がって「オッケーよ」と言
いました。

「じゃあ、それでいいわよ、こっちだってヒッチハイクみ
たいなもんなんだから。もっと素敵な同行人が見つかつ
たらためらわず乗り換えるわ。けど何だ、タムは冷たい

人じゃないのかと思ったけど別にあったかい人でもないか。」

「ゴメン。」

タムは多分、ヒッチハイクという言葉を理解していないようでしたが、また処世術のような態度で無神経に謝りました。

「何よその態度つ。…まあ、いいわ。もう今日は色々ありすぎてもう何も考えたくないもの。」

「無責任だけど僕はサヤが意外にタフで安心したよ。まあ、今日はこの街の宿に泊まってゆっくり休もうよ。」少し苦笑いしながらタムは言いました。

「安心しないでよ、女のコは本当に切実な時には平気なフリをするものなの。」

サヤがムカついて言い返すとタムが「じゃあ、またしばらくよろしく」と他人の話をきかないカンジで言ったのでサヤは「やつぱりこの人とは馬が合わない」と思いましたが、それでもこの不安だらけの呪われた世界の中でまた道連れの他人が出来たことに心の中で少しだけ感謝していました。

翌朝、サヤとタムは山越えの準備を整えるとカシオペアの街を発ち、オリオンへと続く長い路を進み始めました。

タムはやっぱり基本的には無愛想でしたが、カシオペアまでの道中の時に比べるといくぶんかサヤに対して心を開いてくれるようになった気がしました。ちょうど険しかった山道を無事に抜け、また平坦な道へと入った頃、サヤはタムにオリオンへと向かう理由のことをたずねました。サヤはカシオペアの街でタムが「僕の旅の目的は『アイス』を手に入れることなんだ」と言っていたことがずっと気になっていたのでした。タムは「最近、ずっと見る夢があつて、その夢の意味が知りたいみたいな、端折つて言うとな、まあ、オリオンへ向かう理由はだいたいそんなようなことなんだ」と、まるで他人にわかってもらう気がない説明をしました。

「あの占い師のお婆さんのところに行つたのもそのヒントを掴みたくてだったんだけど、結局、あの時はサヤのことがあつて占つてはもらわなかったから……。だからやっぱり自分でも自分が何を期待してオリオンへ向かつてるのかよくわからない。」

サヤが相変わらず要領を得ない人だなと思ひながら「もつとわかるように説明してよ、それと『アイス』とどう関係があるの?」と言うと、タムは「だってこの話は僕の個人的事情に関わりすぎてるから」と言いました。

「何でタムはそんなに人との間に壁をつくらうとばかりするのよ。」

サヤが腹を立てて思っていたことを言うと、タムは少し迷った後、「別に話してもいいけどあんまりオモシロイ話じゃないよ」と言いました。

サヤがタムの方を見て目でうなずくと、タムはやがて自嘲気味な苦笑いを浮かべながらポツリポツリと自分のことを話し始めました。

それはタムの物語でした。



第2章

タムの物語

タムの物語①（タムの青春）

タムはオリオンの街で生まれ育った。タムは一人っ子だったが近所にナムという兄弟のように仲のいい友達がいた。

小さい頃、2人は何処へ行くにも一緒だった。ナムとタムはまるで正反対の性質を持っていたのだけれど、お互い深いところで相手のことを必要としていて喧嘩してもいつもすぐに仲直りした（2人はしょっちゅう喧嘩していたことも事実だったのだけれど）。

13歳になるとナムもタムも上級学舎（こっちの世界でいう中学校と高校が合わさったようなトコロらしい）へ上がった。オリオンでは13歳になったら何処かの職人組合の徒弟になることが普通だったから街に上級学舎の数は少なく、ナムとタムは必然的に同じ学舎の同じクラスになった。

けれどその頃から2人は以前程つまなくなかった。

ナムは少しガラの悪い“大人びた”クラスメイト達と付き合うようになり、おとなしかったタムはまわりのみんなと距離をとりながら自分の空想の世界に閉じこもりがちになった。それでもかろうじてつながってはいた2人の関係が元に戻せなくなってしまうのはナムに1枚の黒いツバサが生えてからだった。

その頃、同級生の中にはまだツバサが生えている者は他におらず、ナムにツバサが現れた次の日から皆はナムを怖がり避けるようになったのだった。ナムはクラスで孤立していった。ナムはナムを怖いと思ったたりしなかったが、積極的に近寄っていく理由も見つけられないまま、ナムの孤立を何となく遠くから眺めていた。

上級学舎の4年生に上がってクラスの中に3、4人黒いツバサの生えた生徒がいるという環境になった頃、ナムの背中に1枚の白いツバサが生えた。白いツバサはナムが“ハクバネ”であることの証だった。

“ハクバネ”は生まれた時の見た目は他の人と一緒だが、成長する過程で、ある時期をこえると背中に霧状の1枚の白いツバサが生えるようになる。“ハクバネ”であればどんなにムナシサを感じようと黒いツバサが生えることも“ケガラワシキ”になっってしまうこともない為、白いツバサはみんなにとって羨望の対象だったがナムにとってはその特別の徴は決定的な孤独の始まりだった。

ナムは学舎でゆるやかなイジメにあうことになる。

そんなある日、ナムは偶然にナムと他のクラスメイト達がナムの悪口で盛り上がっているのを聞いてしまう。その頃のナムには既に7枚の黒いツバサが現れていた。

ナムの言っていた言葉はナムの心に深く突き刺さった。

「ハクバネ」だか何だか知らねえけどアイツは他人に興味がないハードコアオナルシストだよ。キモすぎて見るだけでマジ気分悪いーし。『ケガレ』も寄せつけないくらいナニモカンジナイ心しか持つてないんだつたら生きる意味なくね？ あー、アイツ明日くらいに自殺してくれねーかなあ。」

次の日からタムは学舎へ行けなくなった。

しばらくすると両親は仕方ないから働けと言ったが、何故かその頃にはタムは外に出ること自体が怖くてほとんど出来なくなっていた。

朝寝て、夜も寝て、悪夢ばかり見たがそれでも起きている時間の空白よりマシだった。

そんな生きているのか死んでいるのかわからない生活を2年半程続けたある日、タムは自分の部屋で『アイス』を見つける。

タムは自分が『アイス』を見つけた時、何を思ったかもう覚えていない。ただ、自分がその『アイス』を夜中に近所にあつた山の中にこっそり埋めたことと、その時、久しぶりに涙が出てその涙がどうしても止まらなかったということだけははっきり覚えている。

『アイス』を埋めてから3ヶ月程してタムはオリオンの

街を出ることを決意する。

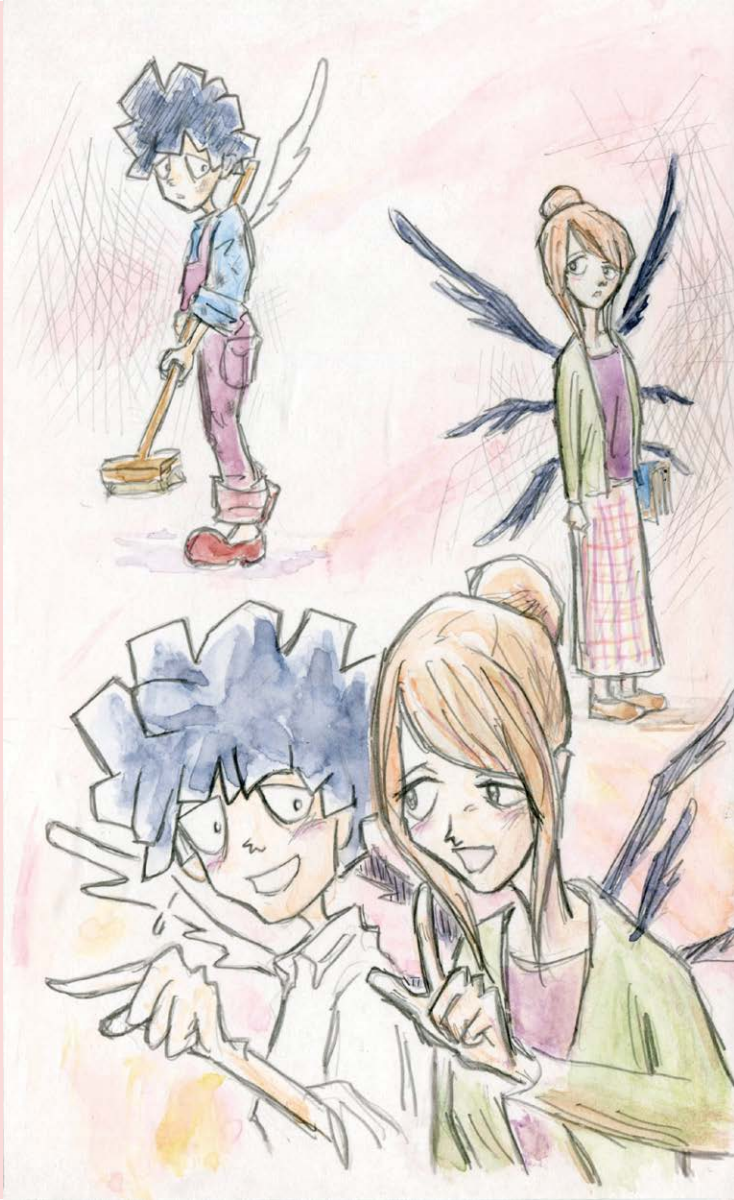
何処か別の街へ行けば何かが変わるかもしれない。タムは心底今の自分が嫌いだった。ココを出て何処か別の街でひっそりと生きていこう。タムはそう思ってた。アンドロメダの街へ行くことにした。

旅費は両親に借りたが、タムはアンドロメダの街で煙突掃除の仕事を見つけた。仕事は楽しかったわけではなかったけれど1人で黙々と煙突の汚れを落とす煙突掃除の仕事はタムに向いていて何とか続けることが出来た。休日には図書館や演奏会に出かけた。

色んなことがギリギリだったけどそれでも何とか明日はやってくる。そんなカンジで気づくと5年が過ぎていた。タムは23歳になった。

そんなある日、

タムはアンドロメダの街で生まれて初めて恋をした。



タムの物語②（タムの初恋）

まるで交通事故のような恋だった。

何も知らずに彼女と出会った。

彼女と会っている時間は夢のように楽しかった。

彼女も彼と居る時間がとても楽しそうだった。

そしてそんなことは彼の人生では初めてのことだった。

彼女とは心がつながっている、

…そんな馬鹿げた錯覚さえ生まれた。

彼女の名前はヒズメといった。ヒズメはタムより2つ年上で街の小さな本屋で働いていた。

3度目に2人で会った時、彼女から①今、自分には付き合っている男性がいること、②その男性からプロポーズされていること、③心の何処かでその男性が人として信じきれてなくて返事を躊躇していること、をきかされた。

そして最後に、あなたの意見をきかせて、と言われた。

タムは言葉につまったが勇気を出して「ヒズメさんはその人のどういうところに惹かれているの？」ときいてみた。

彼女は少し黙った後、わからない、と言った。

「わからない、同じ街で育って、その頃はあまり仲良かったワケじゃなかったけど、この街で偶然再会したの。故郷の街にいた頃はお互い“ケガレ”とは無縁だったけど再会した時には2人とも7枚の黒いツバサが生えてた。”だから“…なのかはよくわからないけど、再会した時、この人とはそういう関係になることが自然なことだと思ったの。多分、向こうも同じカンジな気がする。」

タムは正直、その後、自分が何と答えたのかよく覚えてないが当たりさわりのない一般論のようなことを言っ

相手の男性をかばい場をにごそうとしたということだけは覚えている。けれど、その後、彼女が言った言葉はタムにとつて忘れられない言葉だった。

「そつか、タムは優しいね、私の彼氏もタムみたいだったらしいのに……」

その時、タムはどうしようもなく彼女の手を握りしめなくなつたが、気づくと条件反射するイヌのように「俺は優しくないよ」と言っていた。

彼女はタムを見つめた。とても愚かな話だが、タムはその時、彼女がどういう表情をしていたのかよく覚えていない。

しばらく間があつた後、彼女はタムに「今日はありがとう」と言った。タムはその時、そこに言葉以上の「何か」を感じた気がしたがソレが何か考えようとするよりはやく「いや、俺も楽しかったよ」とわけのわからない言葉を口走っていた。

その日、彼女と別れた後からタムは抜け殻のようだった。タムは何日も食事をとらず仕事にも行かなかった。ただ自分の部屋で仰向けになつて天井ばかりを見て時間をやり過ごした。

そんな虚ろな意識の中で、眠りは浅かつただけけれど何度も見る1つの同じ夢があつた。

「見知らぬ森の中でタムは夢中で地面を掘っている。すると地面の中から緑の“アイス”が出てくる。タムはそれが自分が18の頃に拾って家の近所にあつた山の中に夜中こっそり埋めたモノだということを思い出す。奇妙なことにその“アイス”はとてもあたたかく、まだ光を失っていないかった。タムがその“アイス”に触れるとタムの白いツバサが黒く変わる。タムは歪んだ喜びを得てその羽を皆に見せびらかしに行こうとするが、タムが街に帰るとそこに人の姿はない。」…だいたいいつもそのへんで目が覚めた。

タムはヒズメに“アイス”の魔法をプレゼントしたいと思うようになった。自分には何の価値もない、そんなことはずっと前からわかつている。けれど“アイス”を手に入れたその“アイス”でヒズメの“ケガレ”を癒してやることが出来るなら自分はヒズメにとって「そばに居てもいい人間」になるはずだ。そうしたらその時にヒズメに自分の気持ち打ち明けよう。

「そんな男のところになんて行くな。ずっと俺のそばに居てくれ」と。

「俺は君を幸せに出来る男だ」と。

“アイス”は欲しいと思って手に入るようなものではない。

もしそうならみんな苦しまずに済むのだろう。

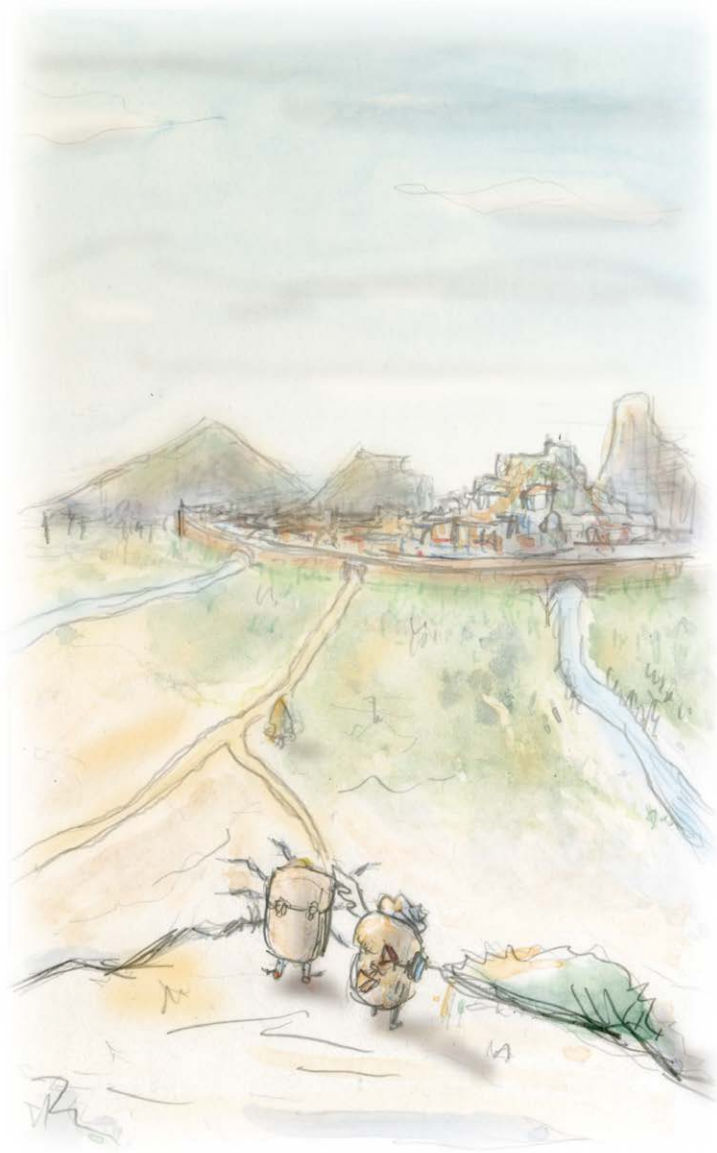
けれどタムは自分にはもう一度かつて自分が土に埋めた“アイス”と向き合うべき時が来たのだと思った。

「オリオンへ帰ってあの“アイス”を掘りおこそう。」

そう心に決めてタムはオリオンへ向かう。

——その旅路でサヤと出会ったのだった。





第3章

奇跡の石

オリオンの街はカシオペアより幾分か小規模な、坂の多い田舎街でした。

サヤとタムが到着したのはちょうど夕暮れ時で、2人はとても疲れていましたが、街に着いてすぐ、その足で「タムが昔、＼アイス＼を埋めた場所」を見に行くことにしました。その場所は、小高い山の中腹にあったのですが、そばには大きな道路も通っていて、小さな公園のようになっています。

「5年ぶりだけどここはあんまし変わらないな。」

タムがぼそりと言いました。

「どのあたり？」サヤがたずねるとタムはその開けた公園のような場所の真ん中に立っている1本の大きな木を指しました。「確かあの木の根元だよ。」

「……。今から掘ってみましょうよ。」

サヤはそこに立つと自然にそう言っていました。もちろんタムは反対しませんでした。

2人はタムの荷物の中からスコップを取り出すと、こうたいごうたいにその場所を掘り始めました。

小一時間程掘った頃、タムが掘っている順番の時にスコップの先が硬いものにぶつかり、地面からハート型の石が出てきました。

けれど、当たり前ですがそれはもうただの石で何の光も放ってはいませんでした。



タムはその石を手にとってしばらくながめると、それを地面に置き、自分もその場に座りこんでしまいました。サヤは何となくタムの隣に座ると空を見ました。

オリオンは標高の高いところにあり、今日はよく晴れていた為、星がよく見え、空は宝石の散りばめられた暗いビロードの絨毯のようでした。

「僕のことを軽蔑するかい？僕は11枚のツバサがある君のことを差し置いて自分の為の“アイス”を求めてたんだ。」

タムがサヤの顔も見ずに言いました。

「別に軽蔑なんてしないわ。けど、ここに埋まってた石はもう“アイス”じゃなかったね。」

タムは黙っていました。

「ねえ、タム、“愛す”ってどういうことだと思う？」

サヤはタムにカシオペアで自分がクロエからされたのと同じ質問をしました。

「わからないよ。わからないからここまで来たんだ。」

2人の間に沈黙が流れました。サヤは言葉を探しながらその話題を続けました。

「∴。“愛す”ことと“アイス”の魔法を使うことは同じことなのかな？」

「違っつていうのかい？」タムがつっかかりました。

「わからないわ。わからないからきいてるんじゃない。」

サヤはタムの傍らにある光を失った石を見ました。

「けど、もし仮に今、そこにあるその石がタムが夢で見たとおりまだ光ってて魔法の力を失ってなかったらタムは救われたのかな？」

タムはサヤの方を見ましたが、何も答えませんでした。

「私の両親ね、離婚してるの。」

サヤは唐突に言いました。

「離婚の詳しい原因は私にはわからないけど、とにかく私のお母さんは私が12歳の時、お父さんじゃない男の人と出て行ったわ。一時はお母さんのことが嫌いになったこともあったけど、今はたまに会ったりして仲良くやってるし、私はお母さんのこと尊敬してる。…そのお母さんの話なんだけど、前にしばらくぶりにお母さんに会ったら、すぐくキレイになったなって思ったことがあって、その時、彼女にそう伝えたら、『愛される人になろうとするのは悲しい。目の前の人に対して心を開く方が素敵になれるわ』って言われたの。それから、『それが出来ればみんなからは好かれなくても居場所になってくれる人は見つかるものよ』とも言ってた。私にはその時のお母さんの言葉の意味は正直、よくわからないけど、それをきいた時、ウチにいた時のお母さんはお父さんに心が開けなかったんだろうなって、確かそう思った。

…こんなこと言うところエラそうかもしれないけど、たとえば「アイス」が手に入ってもヒズメさんに対して心が開けない限り、タムは救われないんじゃないかな？」

しばらくタムは何も言いませんでしたが、その沈黙の後、「決めつけるなよ、僕はヒズメさんに対して心を閉ざしてなんかなかった」とぼそりと言いました。

「…………。そっか、ごめん。これからどうしようか？」

サヤは少し無理して笑いながら言いました。

その時、サヤの言葉に呼応するかのように、タムの傍で「パキッ」という何かが爆ぜるような音がしました。

見るとタムの横に置いてあったハート型の石の表面に小さな1本の亀裂が現れていて、奥から薄ぼんやりとした緑の光が漏れていました。



「え？」

サヤが驚いてその石を手にとると、サヤの指がそこに触れた瞬間、亀裂の中からほんわりと緑色に輝く光の玉が飛び出してきました。





光の玉はサヤとタムの眼前を通過すると、徐々に加速しながら浮上していき、やがて空高くで動きを止めると、そこで方向を変え、流れ星のように市街地の方へ向かって落下していきました。

緑の光が地上の闇に吸い込まれて見えなくなると、後には何事もなかったかのような静止した夜と、今度こそ完全に光を失ったハート型の石だけが残っていました。2人は混乱しながら今、目の前で見たことの意味を反芻しようとしてしばらく黙っていました。が、やがてサヤがタムに「今の何が起こったかわかる？」とおそるおそるききました。

「わからない。僕らの世界の常識でもあんなのはきいたことがないよ。」

タムとサヤは顔を見合わせました。

「生まれたのよ！」

サヤが突然叫びました。

「あの光は落ちた先で“アイス”になってるような気がする！ 私達はきつと“アイス”が生まれた瞬間に立ち会ったんだわ。…きつとそう。とにかくあの光が落ちた先へ行ってみましょうよ！」

サヤが言うのとタムはサヤの手の中の石を見て少し熱に浮かされたような顔をした後、冷静さを保とうとするか

のように言いました。

「あれが何だったかなんて本当にわからないよ。それに仮にサヤの言う通りなんだとしても、その“アイス”にはもう新しい持ち主がいるかもしれない。行ってみる価値はないかもしれないよ？」

「じゃあここであきらめるの？」

タムはそれをきくと少し黙った後、口を開きました。

「サヤはどうして信じていられるんだい、…石のことも、僕のこと？」

タムは少し怯えながら挑むような目でサヤを見ていました。

「『信じてる』っていうのとは少し違うわ。」サヤは言いました。

「“アイス”が手に入るとか入らないとかそういうことじゃないのよ。けど私はタムと一緒にあの光を追ってみたい。」

サヤはそこで言葉を切った後、少し恥ずかしそうに続けました。

「私も誰かと“愛す”を上手く分かち合えたことがない気がするから。」

タムは笑わず黙ってサヤの顔を見ていました。

やがてタムはぎこちなく顔をくずして、少し恥ずかしそうに負けを認めました。

「わかったよ。…何も根拠はないけど君の言うことは何か正しい気がする。明日、あの光が落ちたあたりと一緒に探してみよう。」

タムは笑っていました。

サヤは何となく嬉しくなって光を失ったハート型の石をタムにパスしました。タムはあたふたしながらそれをキャッチして、それからしばらく黙ると、急に「けど」と言いました。

「けど、あれは多分君が居たから起きた奇跡な気がする。だからもし仮にあの光が“アイス”になっていてそれが僕のものになるようなことがあるなら、…もしそんなことがあるなら、その時は僕はその“アイス”はサヤの為に使うよ。」

サヤはタムの言葉にびっくりしました。サヤは内心嬉しいと思いつつ「じゃあタムの好きな人に使う分はどうするの？」とききました。

「またこの次に僕が“アイス”に選ばれるのを待つよ、僕は運がいいんだ。」

タムの答えにサヤは少しあきれましたが何も言いませんでした。

タムは今しがた光を生んだ、亀裂の残る元“アイス”の石をもう一度元の場所に埋めようと思いました。サヤは

何だか“石”がかわいそうな気がしました。

「ねえ、タム、それ、また埋めちゃう気なんだったら私にちようだいよ。何かカワイイし『タムがちよつと大人になった記念』に持つといたげるから。」

サヤがそう言うのとタムは少しむくれました。

「何だよ、『ちよつと大人になった記念』って。」

「ま、何だっていいじゃない。」

サヤは照れ隠しにタムのそばまで大股でジャンプするとタムの手から石を取って自分のポケットの中に入れました。

「君って変わったコだよね。」

タムは「子供だな」というような口調でそう言いました。

サヤはそんなのはお互い様だと思いましたが口には出しませんでした。



その日、2人はタムの実家には行かず（タムが許してくれなかったので）、街の宿屋に泊まり、次の日から落ちた光の搜索を始めることにしました。

光の行方探しは思った程簡単ではありませんでした。

緑の光が街に落ちたのは日没後まだそれ程経ってない時刻だったというのに、サヤ達が話をきいて回った限りでは、街にはその時間に空から降ってくる光を見た人は1人もいなかったからです。

何の手がかりもないまま2日が過ぎ、タムとサヤは疲れ果ててしまいました。

「やっぱり、あの時僕らが見た光は幻だったのかな…。」

光の行方を探し始めてから3日目の昼頃、2人で街の中央にある橋の欄干にもたれかかりながら道行く人々をながめていた時、タムがぼそりと言いました。

「もし幻じゃなかったとしたって、やっぱりあれが新しい“アイス”になったって考えるのはちよつと早合点だったかもしれないし…。」

サヤは何も答えませんでした。けれどサヤは当たり前のようにタムの弱音には賛同しておらず、「あれはきっと“アイス”の生まれた光で、私達はあの光を追う義務がある」という考えをゆずろうとは思っていませんでした。



「わかったわ。どうしてもかはわからないけどあの光は私達にしか見えなかったのかもしれない。この近所で最近“アイス”を授かった人を探しましょう。」

「おいっ。」タムがめずらしく声をあげました。

「冷静になれよ、君は僕の話を書いていたのかい。それに“アイス”を授かった人が仮にいたってその人に会ってどうする気なんだよ。…おい、サヤー！」

サヤはタムの話も聞かず橋を渡ってずんずん行ってしまいました。タムは軽くため息をつくときサヤの横には並ばず、不機嫌な顔のまま無言でサヤの後についていきました。

それから日が落ちかける時刻までサヤは街中の人に嫌な顔をされながら“アイス”のことをきき続け、タムはサヤとは口をきかず、ただその後ろを仏頂面で歩き続けました。

「気が済んだかい？」

夕方になって元の橋の場所に戻ってきたタムがようやく口を開きました。サヤはカチンとききました。『気が済んだか』ですって？ どういうことよ！ これは元々タムの…。」

サヤが半ばヤケクソ気味にそう言いかけた時、サヤの視界に自分に向けられた敵意の視線が映った気がしてサヤは言葉を止めました。



その視線は橋の向こう側にいた老人が送っていたものでした。その老人は感情の読めない濁った目でじつとサヤ達の方を睨んでいました。サヤが自分の気のせいかもしれないと思いつきながら目をそらすと老人はこちらへと近づいてきます。サヤは喧嘩していたことも忘れ、思わずタムにそちらの方を見るよう目でうながしました。

「“アイス”の持ち主を探してどうする気なんだ？」

サヤの目の前まで来た時、老人が突然そう言いました。老人には3枚の黒いツバサが生えていて、その声には対象を持たない怒気のような感情が染みついています。サヤが何も答えられずにいると老人は勝手に言葉を続けました。

「さつき向こうの露店の角であんたのことを見かけたんだ。聞こえてきた話が聞き捨てならなくてね。まあ、理由はだいたい想像がつくさ。同情を買ってその黒いツバサを消してもらおうってハラだろ。だがな……」

老人がそこまで言った時、サヤは小さな声で「違います」と言いました。

老人は少しだけ眉を動かしました。

「ほう、じゃ何なんだ？」

「わかりません。……どうするかは会ってから考えようと思ってます。」

老人はそれをきいて勝ち誇ったような嫌な笑い方をしました。

「フン、随分軽い脳みそだな。『ケガレ』や『アイス』は誰にとつてもナイーヴな問題だ。考えもなしに他人の『アイス』に関わろうとするなんざ誰の為にもならんことだと俺は思うがね。」

「おっしゃることはもつともだと思えます。けど僕らは……」
タムが老人をなだめようと曖昧な言い訳をしかけた時、それを切断するようにサヤが言いました。

「たくさん考えた人の行動が感じたまま動く人の行動より正しいとは限らないわ。」

老人はサヤを睨みました。タムはサヤの発言にあわてたような顔をしました。

老人は濁った目のまま言いました。

「正しいか間違ってるかはお前さんが決めることじゃないだろう。大人には礼儀として守るべきルールがある。俺の言いたいのはそういうことさ。」

「そう。けど正しさを決めるのはあなただでもないわ。行きましょ、タム。」

サヤは何だか腹が立っていました。

「待てよ、そんなに喧嘩腰になることはないだろ。それに僕は君と同じ考え方ってわけじゃないよ。」

タムはサヤをなだめようとしてましたが、サヤはその言

葉で忠実だと思っていた飼犬に見捨てられたような気持ちになりました。

「何よタムまで、じゃあココで2人でずっとネガティブなお話でもしてればいいわ。じゃあね。」

サヤはそう言うと言んだ早足でタムと一緒に泊まっている宿屋とは反対の方向へ向かって歩いていきました。

2人に背を向けて歩き出した後、サヤは「もしタムが追ってきてくれなかったらどうしよう…」と思いました。が、タムはやっぱり追ってきてくれました。

「おい。」

追いついたタムが言いました。

「何であんな言い方するんだよ、＼アイス＼が見つからないからってさっきのサヤの態度はちょっとおかしいよ。」

タムはサヤが何処へ行こうとして歩いているのかについては触れませんでした。

「おかしいのはタムの方よ。あのオジイさん、気持ち悪い目つきして勝手なことばかり言っつて、あんな人にヘコヘコするなんて信じられないっ！」

サヤは追ってきてくれたことに対する感謝の気持ちも忘れて怒りをぶちまけていました。

「しょうがないよ。どんな人も＼アイス＼のことについては色々事情を抱えてるものなんだから。」

サヤはその時のタムの声色にひっかかりを覚えました。

「…知ってる人だったの？」

「うん、喋ったのは初めてだったけどね。色々有名な人だから…。」

「ふーん。」

「まあ、いいや、今日はもう宿に戻ろうよ。」

「どういう人なの？」

サヤはタムがこの話題を切り上げようとすることを許しませんでした。

「え、…もういいだろ、あの人のことは。どういう人って…まあ一言で言うならしょうがない人だよ。」

「だからどうしようがないかを説明してよ。」

サヤは理不尽に冷ややかな態度をとりました。

「…何で気にするんだよ、さっきはあんな態度だったのに。」

「ムカつくから気になるのよ。」

タムはどうしてもしゃべりたくなさそうでしたが、やがてサヤの頑固さを悟ると小さくため息をついて、「わかったよ」と言いました。

「あの人の名前はシバっていうんだ。」タムは言いました。

「僕があの人を知ってたのはある事件を起こしたことであの人が有名な人だったからだよ。」

サヤはうなずきました。

「シバは今から10年前に12枚のツバサが生えた自分の娘を

“マゴコロの家”に入れず、自分の家に隠していてね。それで有名なんだよ。」

「それだけで？」サヤは意外に感じました。

「ああ、かなり大変な事件だったんだ。当時、シバは奥さんのサラと娘のノラと3人で住んでた。娘って言っても、ノラももうだいぶんいい歳だったみたいだけど、彼女は結婚しないまま両親と一緒に住んでたみたいでね。それから一緒に住んではなかったけどシバにはもう1人子供がいた。その人はノラより2つ年上の長男で、今でもこの街で酒造り職人をやってるロナンって人さ。ロナンはその頃のもうだいぶん前に結婚していて、子供はいなかったけど自分の奥さんと一緒にシバの家の隣に居を構えて住んでた。

そんな状況でノラに12枚目のツバサが生えた時、シバは苦しんでるノラから離れることが出来ずに彼女を家の中の一室に閉じ込めたらしいんだ。そうしてサラ以外の人間にはそれを隠し通したまま『ノラは“マゴコロの家”に入れたよ』って嘘をつき続けた。……。どうなったと思う？」

「どうなったの？」サヤは少し嫌な想像をしながらたずねました。

「必然のようにノラは“ケガラワシキ”になってしまい、理性を失ったまま隣に住んでいたロナンの奥さんを殺害

した。そうして、そのノラも、その後すぐに駆けつけてきた警備隊の手によって射殺された。」

サヤは言葉が出ませんでした。ついさっき面と向かって話していた実際の人間とその凄惨な事件の“登場人物”がどうしても繋がりませんでした。

「シバはその後、“マゴコロ保護法”を犯した罪で投獄されてたんだけど、4年程経った頃に恩赦を与えられて出てきて、けど、その直後に今度は病気で奥さんを亡くしてる。僕は街を出ていたし、今のあの人がどういう状況かは知らないけど、もちろんロナンとは絶縁状態なんだろうし、あの人は、多分、まだ自分の罪に囚われたままものすごく孤独に生きてる人なんだろうな、とは思うよ。まあ、想像でしかないけどさ。」

サヤは正直、きいてしまったことを後悔していました。サヤはシバの抱えている罪の話を自分の心でどう受け止めていいかがわかりませんでした。が代わりに「何よ、あのオジイさん、『大人には守るべきルールがある』って自分が一番ルールが守れない子供なんじゃない、自業自得よ」と漏らしてしまっていました。

「『ケガレ』のことはそんなに簡単に割り切れることじゃないよ。」

サヤの言葉をきくとタムがたしなめました。

タムの大人ぶった態度に腹が立ったサヤは「わかつてるわよ、私はタムと違って“ケガレ”だらけなんだから」と言っていました。

サヤは「しまった」と思いましたが、タムは何も答えませんでした。

その時、突然、後ろから声をかけられました。

「オイ、タム！お前、タムだろ？」



サヤ達が驚いて振り向くと、そこには今の声の主らしき青年がいて、「びっくりしたぜ。白いツバサの奴がいたから、まさかと思ったんだ」と火照った顔を嬉しそうに輝かせました。見るとその青年は3枚の黒いツバサを持っていて、やさしい笑みが癖になっているような温厚そうな顔をしていました。彼は少し息があがっていて、走ってサヤ達に追いついてきた直後のような様子でした。

タムが「ああ」と言って、少し驚きながら気まずそうに微笑むと、そのやさしい笑みの青年は「変わってねーな、お前は。けどまた会えて嬉しいよ」と言って苦笑いしました。

「2人は知り合いなの？」サヤがさっきのシバに関する話から目の前の青年の存在に関心を移しきれずに戸惑いながらたずねると、その青年は「いや、知り合いじゃなくて友達だよ。まあ、こいつがどう思ってるかは知らねえけど」と言ってタムの方を見ました。

タムはまた気まずそうに笑いながら「友達だよ」と言いました。青年は仕方ない奴だという顔をした後、「あ、俺はマヒト。君はタムの彼女か何か？」とサヤに向かって言いました。

「いえ、彼女じゃないです。わけありの道づれみたいなもので、サヤっていいいます。」

「そっか、わけありってからには細かいことはきかないで

おくよ。よろしくね、サヤちゃん。」マヒトは少しおどけた態度で言いました。

マヒトはしばらく黙ってサヤとタムを見つめた後、少し疲れた顔で微笑むと、急に「縁って不思議だな」と言いました。

「俺、今、結構しんどいこと抱えてて、どうしていいかわからなくなりかけながら歩いてたんだけど、顔をあげたらたくさんの黒いツバサを持った女のコと白いツバサの男が歩いてるのが見えて、正直、お前らの背中を見た時、『ああ、誰かが俺の為に描いてくれた“希望”が目の前に飾ってある』って思ったよ。まあ、自分でもかなり勝手な思い込みだとは思うけど、それが本当にあのタムだったなんてさ。今日、たまたま用事があってナムにも会ったんだ。お前がオリオンに帰ってきたんだったら、また今度3人で会おうぜ？あ、サヤちゃんも一緒でもいいけど。」

マヒトが言うのとナムは「ああ、…帰ってきたのは用事があったからなんだけどね」と曖昧な声を出しました。

サヤは「ナム」ときいてタムの話に出てきたあのタムの同級生のことだろうなと思いました。

けど、白いツバサのタムと11枚の“ケガレ”のツバサのある私が一緒に居るのを見てそれが「希望」だと思ったとはどういうことだろう、この人が抱えているという「しんどいこと」というのと関係があるんだろうか？

サヤがそんなことを考えているとタムの様子を察したマヒトが「…まあ、まだちよつとシコリがあるならナムと一緒に会おうって話は無理にとは言わんけどさ」とタムに言いました。タムは「考えとくよ」と、まるで考えていないような口調で答えました。

マヒトはポケットから時計を出して時間を確認すると、またタムの顔を見て少し迷いながら言いました。

「よかったら、明日の午前中、ウチに来れないか？お前ともうちよつと色々喋りたいんだけど今日はこれから行かなきゃならないところがあるからゆっくりしてられないんだ。場所はお前が出て行く前と変わってないからさ。もちろん来れるんならサヤちゃんも一緒に来て欲しいな。」

タムとサヤは顔を見合わせました。タムは迷っているようでしたが代わりにサヤが答えました。

「行きます。」

マヒトはそれをきいて嬉しそうな表情を浮かべると「じゃあ、今日はちよつと急ぐから」と言って去っていきました。

「何だ、タムにもいい友達がいるじゃない。」

マヒトが去った後、サヤが言いました。

「僕は正直、マヒトが少し苦手だよ。いい奴過ぎて何考えてんだかわかんないんだ。」

サヤはちよつとびつくりしました。

「そお？タムがひねくれ過ぎてるだけじゃない。」

タムは否定も肯定もしませんでした。

「それはそうと明日マヒトのところへ行く約束をしちゃったけど、アイス”探しはどうするんだい？」

タムが言いました。

「考え方を変えたの。」サヤはポケットの中にある石を何となく手の中で転がしながら答えました。

「あの光は私達が出会うべき人の元に行ったはずなんだって考えることにしたわ。だったら闇雲に探すんじゃないかってタムのことをもっと知らなきゃ、ってね。」

「ふーん、君は本当に”石”のことを信じてるんだね。で、：出会うべき人って今日のあのシバみたいな人かい？」タムは少し皮肉っぽく言いました。

「冗談やめてよ。いくら同情出来るような過去があるからってあの人が嫌な人だってことは変わらないもの。」サヤは口をすぼめました。

「ま、いいや。僕ももうちよつとだけ君の勘を信じてみることにするよ。：今日は僕もちよつと意固地になってた。自分のことなのに『気が済んだかい』なんて言って悪かったよ。」

「いいわよ、いちいちあやまらなくても。色々とお互い様ですもの。」サヤは自分がさつきタムに無神経なことを言ってしまったことを思い出しながら言いました。

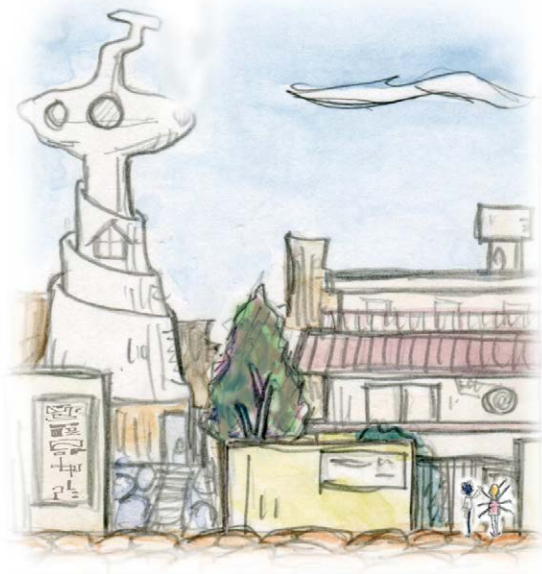
街灯がポツリポツリと灯り始めました。

気づくと2人はそれぞれに明日に期待しながら並んで帰り道を歩いていました。



翌朝、サヤとタムは朝食を食べ終わるとすぐにマヒトの家を目指しました。タムの話によるとマヒトはタムと同年の今年23歳。13の頃から酒造店「呪い橋」で働いていて、その時からずっと、その店の隣にある家に酒造り職人の親方と一緒に住んでいるということでした。そして、

なんとその酒造り職人の親方というのは昨日のタムの話の中に出てきたシバの息子、ロナンのことだときいてサヤはびっくりしました。狭い街だというべきなのか不思議な偶然というべきなのか、多分その両方なのでしょうが、サヤは昨日のタムの話をきいたせいでその家でロナンに出会ってしまうのが怖いようなだからこそ会ってみたいような何とも言えない気持ちでその家へと向かう道を歩いたのでした。



「呪い橋」は昨日の橋のある地区の西隣の地区の中にありました。「呪い橋」に着いたサヤとタムがマヒト達の住んでいる家の方を訪れると、少しふくよかで素朴な顔をした若い女性が出迎えてくれ、その後ろからマヒトが顔を出しました。

マヒトが通してくれた客間には、少し古いけどしつかりした造りのゴツゴツした椅子と机と共に、色んな形をした色とりどりのカラフルな瓶がたくさん入った戸棚が置かれていて、瓶の中身は全て色んな場所で造られたお酒のようでした。マヒトと一緒にサヤ達を出迎えてくれた若い女性はサヤ達を客間に通すと、マヒトに「じゃあ、私は店の方に行くから」と告げて、柔和な笑顔でサヤ達に深くお辞儀をして部屋を出て行きました。

「来てくれてありがとう。」

女性が出て行くとマヒトが改まって言いました。

「本当は平穏な日に一緒に美味しい酒でも呑みながら1日くらいかけてゆっくり語り明かしたいとこだけ俺は今日も仕事とは別にこの後、行かなきゃいけないところがあるからあんまりゆっくりはしゃべってられないかもしれない。けど、突然街を出て行ったお前のことはずっと気になってたし、何となく久しぶりにお前の顔を見たら俺が今、抱えてる問題の突破口をお前がくれるような気がしてな、……どうしても今、お前と話がしたいと思ったんだ。」

「うん。」タムは答えました。

「けど、お前、仕事に行かなくて大丈夫か、ロナンに怒られないのかよ？ それからさっきの女のヒトは誰だ、初めて見たけど……？」

「ああ、さっきのは俺の嫁だよ。去年、結婚したんだ。親方は…。まあ、そのことは追々話すよ。」マヒトは少し言いよどみながら答えました。

サヤはマヒトが結婚していたときいて少し驚きましたが、タムは友達のはずなのにサヤより低いテンションで「へえー」と漏らしたただけでした。それでも空いた間のバツの悪さに気づいたのか、ワンテンポズレたタイミングで「ああ、おめでとー！」と少し無理矢理な感嘆をあげました。それをきくとマヒトは「お前らしい祝福だな」と言つてやさしく笑いました。

しばらく間がありました。

マヒトはどう本題を切り出していいか迷っているような様子でした。そして途中で考えるのをやめたように唐突なタイミングでタムに「何でオリオンを出て行っただ？」とききました。

「色々理由がありすぎてもう覚えてないよ。」タムは笑いながら答えました。

「ナムのこと気にならないか？確かお前が出て行った時はあいつが『マゴコロの家』に入ってしばらく経った頃だったろ？」そう口にしたマヒトの目は笑っていませんでした。

タムの顔が凍りついたのをサヤは感じました。マヒト

はタムの表情に気づいてないフリをするかのように言葉を続けました。

「安心しろよ、あの後、運良くアイツの親父が『アイス』を授かることが出来てアイツはもう自由になつてゐる。しかも『自分と同じ境遇のヒトの力になりたいんだ』とか言つて今はちゃっかり逆に『マゴコロの家』で働いてるよ。アイツらしいだろ？」

マヒトは楽しい話をするようにタムに笑いかけましたがタムはその笑みに上手く答えられていませんでした。

「オ、…俺さ、」

しばらくしてタムがマヒトの目を見ないまま口を開きました。マヒトとサヤはタムの方を見ました。

「…忘れてたよ、ナムが『マゴコロの家』に入つてたこと。」それをきいた途端、一瞬、マヒトの目に暗い光がよぎりました。サヤはマヒトがタムに殴りかかるんじゃないかと思つたくらいでした。それでもタムは言葉を続けました。

「言われたら確かに俺はお前からその話をきいたのをよく覚えてゐる。それで街を出て行く前は部屋に閉じこもつたまま、そのことばかり考えてたんだ。けど、この5年間ずっとそのことにはフタをしてたし、そのフタをとりたいたとも思わなかった。そしたらいつからか本当に忘れて

たよ。：今、言われて思い出したんだ。」

しばらく誰も何も言いませんでした。

サヤは心の中で、タムが“アイス”の説明をしてくれた時、「“アイス”は心の何処かでそれを強く必要とする者の元に現れる」と言っていたのを思い出していました。

タムの中のその「ナム」という人を助けたいという思いがタムの元に“アイス”を引き寄せたのだろうか？？けど、その時のタムはその“アイス”を使う勇気がなくそれを土の中に埋めてしまった。：。そう考えるとサヤはやるせない気持ちでいっぱいになりました。

「そうか。：。」マヒトが沈黙を破って言いました。

「仕方ないから俺も正直に話すよ。」

マヒトは奇妙な前置きをしました。

「俺は自分のことを結構器用で頭のいい人間だと思っている。」

サヤは温厚そうなマヒトの傲慢な告白にびっくりしました。マヒトは続けました。

「たいていは誰に対しても合わせてしゃべることが出来るし、その代わりに誰と居ても心の芯の部分はずっと冷めてる。：他人に上手く期待出来ないんだ。

背中にそれぞれのツバサを背負うようになってから、

お前とナムの関係が上手くいかなかったのは俺も知ってた。けど、俺はどっちの味方になることもせず、上手く距離を保ちながら2人ともと“友達”で続けた。2人とも大切だったからだ。

…信用してなかったけど大切だった。

やがてお前は家から出られなくなって、ナムは“マゴコロの家”に入った。そして俺はその頃のある時にお前が“アイス”を授かっていることに気づいたんだ。」

ナムが目丸くしました。マヒトは出来るだけナムともサヤとも目を合わさないようにしながらしゃべっていました。

「俺はお前にナムを救ってくれと言おうと思った。けど言えなかった。俺は習慣になっていた小賢しさで今まで通り色んなことに気づいていないフリをしながら傍観者を決め込んだ。お前は誰にも“アイス”を使わず、それからしばらくしてこの街を出て行った。

少しさびしかったけど、これはしょうがないことなんだ、と、俺は自分で自分に言い聞かせた。

俺は悪くない。お前もナムも悪くない。

大人になるとはこういうことなんだと。生きていくのは綺麗事じゃないんだと。

ナムは結局助かって、俺は仕事に打ち込んで、残酷なことを忘れる為の幸せも手に入れた。

さびしかったけど平穩だった。いつしか自分と他人の距離に疑問を持つことも忘れていた。

けど今から1ヶ月くらい前、平穩だった俺の世界にまた亀裂が走った。

親方に、ロナンに12枚目の黒いツバサが生えたんだ。」

サヤとタムは同時に息をのみました。

マヒトはサヤとタムの顔を1度ずつ見てしばらく黙ると自分の手元を見たままもう何言か重ねました。

「正直、俺は今、そのことですごく混乱してる。親方は今、”マゴコロの家”にいる。そして、それだけじゃない。俺はおとといの夜、シバが、”あの事件”があつてから絶縁してたロナンの父親が、”アイス”を授かっていることを知ったんだ。」

「まさか!!」サヤは思わず口走っていました。そして口には出しませんでした。4日前の夜に街に落ちた緑の光のことを考えていました。

…あの光はあの濁った目の老人の元に落ちたというのだろうか？

サヤがちらりと視線だけでタムの方をうかがうとタムも読めない表情でサヤの方を見ていました。

「どうしたんだ？」サヤのリアクションにマヒトが驚く

と、タムが「俺達はこの街で4日前の夜に“アイス”を授かったはずの人物をずっと探してたんだ」と言つて、2人がその夜に“石”を掘り起こしたことで、その時、“石”から生まれた緑の光のことをマヒトに説明しました。

「何の因果なんだろうな…。」マヒトは言いました。

「まあいい、話を続けさせてもらおうぞ。」マヒトは少し疲れた真剣な目で2人を見ながら話を戻しました。

「俺はシバが“アイス”を授かつてることを知った時に、すぐにあのジイさんに“アイス”で親方を救つてくれるよう頼んだんだ。けどシバは『ロナンはそんなこと望んでないはずさ』と言つたきりだった。昨日、親方にもそのことで話をしたら『あんな奴に救われるなんてそれこそケガラワシイ』と言つて取り合つてもらえなかった。俺は親方に助かつて欲しい。…けど、2人の感情は当然だと思ふし、心の何処かでその感情はある意味で命より尊重しなけりやいけないものかもしれないなとも思つてる。…けど、けど、やつぱり俺は、お前が、タムが街を出て行つた時、すぐくさびしかった。昨日、親方のところに面会に行つて、『首を突つ込むな』って言われた時、どうしてかそのことを思い出した。上手く言えないけど『それぞれの事情』つてやつに寛容になつちまうのがさびしいんだよ。」

マヒトはそう言つてしばらく黙つた後、情けない声で

つぶやくように「どう思う？」と言いました。

サヤは何も答えられませんでした。タムも黙って下を向いていました。

サヤは、今、サヤのポケットの中にある亀裂の入った石はロナンとシバのことを知っていてサヤ達をここに導いたのだというほとんど確信に近い予感を持っていました。けど、そんな2人の話をきいてどうすればいいのかは全くわからなかったのです。受け取り方によればロナンの奥さんはシバのエゴのせいで殺されてしまったとも言えるのです。シバには今さら「ロナンを愛す」などという資格はないのかもしれませんが、けれど、シバは心の何処かでロナンを救う為の奇跡を強く望んでいたからこそ「アイス」に選ばれたというのもほんとうなのでしょう。当事者以外が踏み込んではいけないことなのか、だからこそ踏み込むべきことなのか、それすらもサヤにはわかりませんでした。

「何とかして2人を会わせよう。」

唐突にタムが言いました。

「どうするべきかは最終的にはシバにしか決められないことだと思う。けど、俺は自分が昔、真っ暗な場所に閉じ込めた「アイス」を掘り起こしたくてココに帰って来たんだ。

その続きをやらせてくれ。」

サヤは少しドキリとしました。そして気づくと「私にも手伝わせて」と言ってしまったいました。

マヒトは少し情けない顔のまま2人を見つめると、やがて「俺は卑怯者だ。お前達がそう言うてくれるのを最初からずっと待ってたような気がするよ。」と言ってその顔のまま少し苦い目で微笑みました。

サヤは2人に賛同しながら、正直なところ、自分達が正しい方向に向かっていているのかわからないままでした。：もしかしたら一緒になって大きな間違いへ向かって進んでしまっているのかもしれない。けれど、それでも、“アイス”を埋めてしまったタムや、それを黙認したマヒトの歪んだ心の背負い方は自分もそばで見届ける義務があるような気がしていたのでした。

それから3人はロナンとシバをもう一度会わせる計画を立てました。

会合の日時が決まりました。

時間は明日の昼、場所は、今、ロナンの入っている“マゴコロの家”の面会室。

マヒトは、ロナンのことは“マゴコロの家”で働くナムの協力を得て自分が何とかして面会室まで連れ出してくると約束してくれました。

「俺の方とはとにかく騙してでも面会室に引っ張ってくる。その代わりタムとサヤちゃんは何とかしてシバの心を溶かしてから連れてきてくれ。…あの爺さんの意志がなければやっぱり始まらないと思うんだ。難しい役目だけど頼んだぜ。」マヒトは言いました。

午後からはタムとサヤは明日の約束をとりつける為シバのところへいくことになり、同じようにロナンに会う為“マゴコロの家”に行くことになったマヒトとは分かれることになりました。サヤは別れる前にふと気になって「どうして今日、私にも一緒に話をしてくれたの？」とマヒトにたずねました。マヒトは少し恥ずかしそうに「昨日、君がタムと喧嘩しながら歩いてるのが見えたからだよ」と言いました。

「抱えているツバサの全く違うもの同士が喧嘩しながら切れないでいる…、俺にとってこれ以上の希望はないと思っただんだ。」

サヤはその理由の思いのほかの幼稚っぱさに笑ってしまいました。

「あ、そうだ。これを持ってきなよ。」

サヤの笑顔を見ると、マヒトは思い出したようにそう
言って、かなり古くなっている小さな額縁をサヤに手渡
してくれました。見ると中には不思議な雰囲気の話が
入っていて、額縁の裏には「呪い橋物語・表紙」と書かれ
ていました。



その画は白いツバサを持つ黒い人間と黒いツバサを持つ白い人間が喧嘩しながら狭い一本道を歩いている画で、不思議なことに描かれている2人は喧嘩しているのに画全体はほんのりと静かなあたたかさをたたえているのでした。

「昨日の朝、親方の部屋を整理してて見つけたんだ。驚いたけどそれは親方の妹が、：ノラが若い時に描いて出版されることになった唯一の絵本の原画みたいなんだ。絵本の内容まではわからなかったけど、『呪い橋』っていうのはウチの店の名前にもなってるし、シバの心を溶かすのの役に立つかもしれないって思うから渡しとくよ。」



シバの家はオリオンの郊外にありました。サヤとタムがマヒトの描いてくれた地図に従いその場所にたどり着くとそこは廃屋と空き地とドブ川ばかりが密集している地域のだ真ん中で、そこに異物のように取り残されていた木造アパートの一室が現在のシバの住居のようでした。タムがその部屋のドアをノックして「ごめんください」というと、しばらくして、しなびた服を着てボサボサの髪の毛の老人が出てきました。…シバでした。



「誰だ、お前さん達は？」シバはそう言った後、眉をひそめて「ああ、昨日の生意気なガキどもか、何の用だ？まさか『アイス』の持ち主を探して一軒、一軒、訪ねてまわってるなんて馬鹿なことじゃないだろうな？」と言って薄笑いを浮かべました。

「いえ、違います。今日はあなたに用があつて来ました。」
タムがそう言う、シバは改まって眉をひそめて、もう一度「何の用だ、何でこの場所を知ってる？」とききました。

「友達からきいてきました。そいつのおかげで僕達が会うべき人が誰かわかったんです。4日前の晩に“アイス”を授かったのはあなただったんですね。」

タムがそう言う、シバは怒りをあらわにしながら、「あのロナンのとこの若造が喋りやがったか。他人の“アイス”には関わるなと昨日、言つたはずだが、それでお前は一体どういうつもりなんだ」と言いました。

「ロナンに“アイス”を使つて下さい。」

サヤがシバを強く見上げながら言う、シバは汚らしいものを見るような目つきで、「俺の“アイス”をどうするかは俺が決める。貴様らのような赤の他人に指図される筋合いはないわ。」と言つてドアを閉めようとした。サヤはとつさにドアの隙間に手を挟み込み、それを阻止しました。

「何のつもりだ、人を呼ぶぞ！」シバが怒鳴ると、タムが「待つて下さい！」と言いました。

「待つて下さい。マヒトが、ロナンのところに住んでる僕の友達がロナンの部屋でこれを見つけたそうです。」タムはそう言う、サヤがマヒトから受け取った「呪い橋物語」

の画を取り出しました。シバのドアを閉めようとする力が一瞬弱まりました。

「ロナンはきつとただあなたを憎んでいるワケじゃない。そのことにはあなただって気づいてるんでしょ？」

「かと言ってロナンと俺の関係はもう2度とは元に戻せん。この世界には取り返せないことというものがあるんだ。」シバが静かに言いました。

「ロナンの命はまだ取り返せるわ。ここで何もしなかったらそれこそもう取り返せなくなるのよ？」

「わかったようなことを言うな！俺がお前らよりも考えてないとも思っているのか？ロナンがお前らよりも苦しんでないとも思っているのか？」シバは激昂しました。

2人は何も言えませんでした。サヤは正直、シバの言葉を正しいと思いました。けど：マヒトの言葉をかりて言うならそれを受け入れてしまうことが「さびしい」のでした。

「：人はいつか死にます。あなたはもうロナンとは一生会うことがないまま、関わり合いになることのないまま死ぬということですか？：本当は愛してるのに。」サヤは苦しくなりながら言いました。

「そうだ。」シバはもつと苦しそうに答えました。

サヤはやっぱ何も言えなくなりました。

「わかりました。あなたの心に勝手に踏み込んでゴメンな

さい。行こう、タム。」

サヤがそうしょんぼりと言うと、タムは黙ったまま動きませんでした。

『呪い橋物語』はどんな話なんですか？』

タムが口を開きました。

「僕はその本を読んだことがあります。けど、この画は、その物語の表紙は、傷つけ合いながらそれでも一緒に生きていけて、そう言っているように僕には見えるんです。」
タムはさすがのような目でシバをじっと見ていました。

シバも濁った目でタムを見つめました。

シバの表情は読めませんでした。が、その暗い目の中にわずかに戸惑いの色が浮かんでいるようにサヤには感じられました。

「いいだろう、上がれ、お前らにも読ませてやる。」

シバは言いました。

シバの部屋はひどく散乱していてシバの生活の荒みが表れていました。シバは空いているスペースに2人を座らせると、本棚の奥から古くなった一冊の薄い本を取り出してきてサヤ達の前にそっと置きました。

本の表紙には「呪い橋物語」と書かれてあり、マヒトから受け取った原画のとおりの画が刷り込まれていました。

「この本だ。」

何故かシバは苦しそうに言いました。

「読んでいいですか？」タムがたずねるとシバは静かにうなずきました。

「昔々、この空の真ん中に神サマが住んでいました。」

絵本の1ページ目はそんな文章で始まっていました。

昔々、この空の真ん中に神サマが住んでいました。神サマは強くやさしく賢い存在でしたが、ずっと独りぼっちだったのでさびしくてむなしくてどうしようもありませんでした。

さびしかった神サマはこの世界を創りました。世界には川が流れ、花が咲き、命が生まれました。

神サマは最初、この世界の誕生をよろこびましたが、やっぱり神サマのさびしさは埋まることなく、神サマに見捨てられてしまった世界はしだいに呪われていきました。

何とかしてさびしさを埋めたかった神サマは呪いの及ばない空の楽園の中にニンゲンを創りました。神サマに創られたニンゲンは皆、白いツバサと霧状の穢れ無き不死の身体を与えられていましたが、代わりに何者にも触れることが出来ませんでした。

神サマはニンゲン達に対して言いました。

「お前達は美しい存在だ。だが決して強くはない。この空の涯てに呪われた世界へと続く“呪い橋”という橋がある。その橋は絶対に渡ってはいけない。橋を渡ればお前達はたちまち呪われてしまうだろう。」

神サマがそう言い終わった瞬間、ニンゲン達はその橋に向かってまっしぐらに走り出しました。

ニンゲン達は次々に橋を渡ると呪われた地上に降り



立って叫び声をあげました。

肉の身体が生まれ、抱き合えるようにも
殺し合えるようにもなりました。

心は呪いに侵され、美しかった白いツバ
サは黒く変わりました。

それを見た神サマは静かに涙を流しまし
た。

その雫は地上に落ちて“アイス”という
魔法の石に変わりました。

もう神サマは独りぼっちではありません
でした。

不思議な絵本でした。サヤはこの絵本が呪われてしまった人間を否定しているのか肯定しているのかわかりませんでした。シバが何故、今、この物語をサヤ達に読ませてくれる気になったのかはもつとわかりませんでした。

「この話の元型は俺が考えたんだ。」シバが嫌なことを思い出すような表情で言いました。

「ロナンに初めて黒いツバサが生えたのは12の頃でな。その頃、まわりの同年の子達の中にはツバサのある子はいなかった。ロナンがあまりに不安そうにするんで、俺がたわむれに考えたのが『人間は誰かと触れ合う為に呪われた橋を渡ってこの世界にやってきた』っていう作り話さ。それからそのホラ話は俺の家族の間での合言葉みたいになった。『さびしい神サマ』のくだりと『アイス』のくだりは絵本にした時のノラの創作だけだな。

ロナンは俺のホラ話を気に入って、つらいことがあるといつも橋のそばで川を見るようになった。

……。『傷つけ合いながらそれでも一緒に生きていけ』か……。俺はそんな意図込めたつもりはなかったが、もしかしたらノラはそう願いながらその表紙の画を描いたのかもしれない。」

「明日の昼前に、サヤと……この娘と一緒にここに迎えに来ます。もし心が変わってたら一緒に『マゴコロの家』に

行きましょう。」タムが言いました。

それをきくとシバはタムを睨みながら吐き捨てるように言いました。

「何度言ったらわかる、無駄だ。ロナンが俺に会うわけがない。」

「いえ、必ず会います。僕の2人の友達が連れて来るはずなんです。」

「俺は行かん。そう言ってるだろう。」

「わかってます。けど僕とサヤは迎えに来ますからそれは覚えといて下さい。」

タムはそう言う、「行こう、サヤ」と言って立ち上がりました。

シバはまだ何か言おうとしましたがタムはそれを制するように「あ、僕はタムです。その絵本、素敵な本だと思っていますよ」とまっすぐに言って、シバの発言を許しませんでした。

シバは悔しそうに「フン」と言いました。

シバの部屋を出た後、とまどいながらサヤはタムにきました。

「あれでよかったの？シバは来るって約束してくれたわけじゃないわ。」

「あれ以上は強要できないよ。それにきつと大丈夫さ。あ

の絵本を見る時のシバの目を見たら何かそう思ったんだ。」タムは無理矢理に笑い顔をつくりました。

翌日の昼前、2人がシバの家に行くとシバはきちんと髪を梳いて、シワの少ない服を着た格好でドアを開けてくれました。タムが「よかった。来てくれる気になったんですね」と言うと、シバは「別にお前に言われたからじゃないがな」と憎たらしそうに言いました。

ロナンの居る「マゴコロの家」はシバの家からそれ程離れていない場所にありました。

3人はチェックを受けて中に入ると、担当の職員に案内されながら、入居者達の交流スペースを抜けて面会室へと向かいました。サヤは「マゴコロの家」に入るのは初めてでしたが、今まで話をきいてきた中で何となく、真っ白い壁で囲われた鉄格子の檻の並ぶ閉ざされた空間、みたいな場所を勝手に想像してしまっていました。が、実際の中は意外に生活感のあるにぎやかな空間でした。12枚のツバサを持つ者同士が奇妙な連帯感で結ばれ明るくおしゃべりやゲームに興じている光景はどこかイビツではありながら微笑ましくすらありました。

けれどサヤのそんな考えはそこを歩いているうちに覆されてしまいました。突然廊下の向こう側から叫び声が

聞こえてきたのです。

「フザケるなよ、こんなもん喰えるか！ どうせお前らは俺のこともすぐに殺す気イなんだろう？ ゼペットの野郎の時だってそうだった。お前らにとつて俺達は怖くて怖くて仕方のない危険な存在なんだろう？ だったらこんなペットみたいな可愛がり方すんな!! こんな気味の悪い幼稚園みたいな茶番の中に閉じ込めやがって、オイ、黙ってんじゃねーよ、何とか言えよ、オイ!!」

叫んでいた12枚のツバサの若い男はすぐに駆けつけてきた職員達に取り押さえられ、何処かへ連れて行かれましたが、サヤが本当にシヨックを受けたのは、その男に対してではなく、まわりに居た12枚のツバサの者達の反応に対してでした。そこに居た者達はすべて先程の男の声が聞こえていなかったかのように談笑やゲームを続けていたのです。それを見てサヤはこの場所の持つ矛盾と闇の深さを垣間見てしまったような気がしたのでした。



面会室の前に着いたサヤとタムが、そこにシバを残したままドアを開けて部屋の中に入ると、そこには12枚のツバサを持つ少し割腹のよい壮年の男性と、鋭い目をした5枚のツバサの青年が、マヒトと一緒に簡素な椅子に座って待っていました。



サヤはきいていた話から12枚のツバサの方がロナンで、もう1人の青年の方が、タムやマヒトの「友達」だというナムだろうな、と思いました。

タムはナムの顔を見ると複雑な表情で目と口の端を歪めて、そつとそちらから目をそらしました。ナムは何の

反応も示しませんでした。

マヒトとの打ち合わせで、今日の会合は、まずサヤとタムが面会室に先に入り、揃った4人がこの会合の真意をロナンに明かしてから、その後でシバを中に招き入れるという段取りになっていました。サヤはロナンの顔を見ると自然と心の中で自分の心臓の音を数えてしまっていました。

「この人達かい私に会いたいというのは？」

入ってきたサヤ達を見ると不思議そうにロナンがたずねました。

「いえ、私達じゃありません。」ロナンの質問にマヒトが答えようとするよりはやくサヤが言いました。

「騙したみたいでごめんなさい。でも、私達はそれぞれの理由で『あなた達』を見届けたつくつてここに来たんです。」サヤの声は少し高揚していましたが笑ってはいませんでした。

ロナンは怪訝な顔をしてマヒトとナムを交互に見ました。マヒトもナムも真剣な目でロナンを見たまま何も言いませんでした。

「そういうことか…。」

その空気からサヤ達の思惑を察したロナンは恐ろしい形相で言いました。

「自分の部屋へ帰らせてもらう。私はアイツに会う気も、

ましてアイツに救われる気も毛頭ない。」

ロナンが立ち上がろうとするとナムが座ったままギョツとロナンの手を掴みました。

「救われなくてもいいです。この場で無理矢理“アイス”を使うなんてことは俺が絶対許しません。だからお願いだからシバに、お父さんにもう1回会ってあげて下さい。：どんなに嫌いで仕方がないと思ってた奴にだって実際に再会出来たらこみ上げてくるものはあるはずです。」ナムは言いました。

「それに何の意味があると言うんだ。」ロナンは怒りながら言いました。

「わかりません。けど俺が、ココに、：”マゴコロの家”に入ってた時、大嫌いだった友達に、救われたいなんて思ったことはなかったけど、けど、ただもう1度会いたかった。ただ会うことで変わる何かがあるかもしれないんです。」ナムは立ち上がってロナンを椅子に座らせようとしながら言いました。

サヤは一瞬タムの方を見てしまいました。タムの表情は読めないままでした。

「離せ！」ロナンはナムを振りほどきました。

「いい加減にしろ、お前ら。あんな奴には会う価値なんてない。私がどれだけあの男に苦しめられたか誰も知らないのだ！」

「シバは知ってるわ！」気づくとサヤはそう言ってしまった。
ていました。

「昨日、私達がシバを説得しに行ったら、シバは言ったものの、『俺がお前らよりも考えてないと思ってるのか？ロナンがお前らよりも苦しんでないと思ってるのか？』って…。シバだってあなたに苦しめられてるのよ!!お互い様じゃない！」

サヤは言ってしまった後、自分がとんでもないことを言ってしまったと気づきましたが、ロナンは虚を突かれたような表情でサヤを見ていました。

しばらく張りつめた間がありました。

「…きつとそうなんだろうな。だが、俺は会わんと言ったら会わん、帰ってくれ！」ロナンが潤んだような血走ったような目で震えながら言いました。

その時、勢いよく面会室の扉が開きました。

「ナム、何の騒ぎだ、さっきから怒鳴りあってるような声が外に丸聞こえだぞ？」

入ってきたのは「マゴコロの家」の職員らしき2人の男でした。2人のツバサの枚数は2枚と7枚でした。

ナムが何も答えずにいると、ツバサの数が2枚の方の男が訝しむような顔をしながらロナンに「何があったんで

すか？」とききました。

「何でもない。ちよつと叫びたくなっただけだ。それより俺は眠い。部屋に帰らせてくれ。」ロナンは言いました。

こうしてマヒトとタムとサヤが企てた“ロナンを救う為の”小さな反乱は始まる前に終わりました。

サヤ達が面会室を出るとシバの姿はもうありませんでした。



その夜、サヤとタムはシバにあやまりに行くことにしました。

シバの言う通りでした。ロナンは何かあってもシバと会おうとはしなかったのです。…。確かに部外者が首を突っ込むにはナイーヴすぎる問題だったのです。サヤもタムもマヒトもそれからきつとナムも浅はかだったのです。

「きつと私達はシバとロナンの傷を広げただけだった。」サヤはそう思いながら黙ったままタムと2人で暗い夜道をシバの家へと向かいました。

シバの家のドアをノックするとすぐにシバは出てきました。シバは意外に明るい顔をしていて「ちょうどよかったです。お前さんらを待ってたんだよ」と言って2人を部屋の中へ招き入れてくれました。

相変わらず散らかったままの部屋には半分くらい空になった酒の瓶が置いてあり、それを見てサヤはシバが独りで酒を飲んでいたことを知りました。

「あんたらには感謝してるんだ。」

サヤとタムがどうしていいか迷いながらとりあえず床に座るとシバが遠い目で言いました。

「特にそっちの嬢ちゃん、ロナンに向かって吠えかかってたろ? 『お互い様』だってよ、きいててスカつとしたよ。」

あれをきけただけでも今日行った価値はあった。その通りじゃねえか…、なあ？」

シバは自嘲気味に笑いました。サヤはとっさにかけるべき言葉が思いつきませんでした。

「ごめんなさい。」

言えたのは用意してきたその言葉だけでした。

「『アイス』ってよ、ひどい石だと思わねえか？」

シバがサヤの「ごめんなさい」を無視したように言いました。

「『アイス』ってのが『愛する』の『愛す』からきた名前なんなら『両想い』じゃないと魔法になんねえようになってりゃいいのによ、…『片想い』でも、まして口先だけの『愛す』でも魔法になるんだ。受け取った奴あー持つてるだけで重くって切なくってしゃあねえぜ、ハッハッ。」

シバは笑おうとしましたが上手く笑えていませんでした。

「怒らないんですね、僕らはあなたを傷つけたはずなのに…。」タムは静かに言いました。

「涙はとっくに枯れてるからな。」シバはぼそりと言いました。

静けさが部屋に満ちました。何処か遠くでサイレンのような音になるのが聞こえました。

「あんた達に感謝してるのは本当さ。今日あそこへ行つて

みれてよかった。…久しぶりにあいつの声もきけたしな。」
シバが言いました。

「僕らはあなたに対して取り返しのつかないくらい失礼な
ことをしたと思ってます。」タムが言いました。

「フン。」シバがやさしく笑いました。

「じゃあこっちから1つお願いをさせてくれねえか？」

「何ですか？」シバの提案にタムがきき返しました。

「俺の“アイス”を、サヤって言ったっけ？…そっちの11
枚のツバサの嬢ちゃんのために使わせてもらいたい。」



2人は息をのみました。

サヤは驚きすぎて最初シバの言葉の意味が頭に入ってきませんでした。けれど冷静になり、シバが何を言ったのか理解するに従い、それに対して自分がどういう感情を抱いているのが逆に定まらなくなっていきました。

正直、安心している自分がいる。けれどこの結末をやるせないと感じる自分もいる。

サヤは答えを求めるようにポケットの中の石を触ってみました。けれど石はただひんやりとしているだけでした。

「お願いします。」

少し間があった後、低い声でタムが言いました。

サヤはタムの顔を見ましたがタムはサヤと目を合わせようとはしませんでした。シバは少し哀しそうに笑うと静かに服のポケットの中から“アイス”を取り出しました。サヤはシバが“アイス”をしまっていた場所を見てシバはサヤ達を招き入れた時からこうすることを決めていたことを知りました。





A large, stylized black Japanese sound effect 'ドン' (Don) is the central focus. It is surrounded by several smaller, similarly styled 'ドン' characters and one 'ドン!' character, all scattered across the white background. The characters are rendered in a bold, calligraphic style with thick strokes and dynamic curves.

ちようどシバが“アイス”を使おうとした時、誰かがシバの家のドアを強く叩く音がしました。シバが舌打ちをしてドアを開けにいくとすると、それよりはやく鍵の音がなかつたそのドアを開けてマヒトとナムが入ってきました。マヒトとナムは共に肩で息をしていて、それが彼らが走つてここまでやってきたことを物語っていました。



「何だお前ら？…ロナンのとこの若造と、…そっちの5枚のツバサの方のは見たことない顔だが、他人の家に勝手に入ってくるやつがあるか。」シバが少し不機嫌そうに言いました。

「ロナンが、親方が、マゴコロの家から脱走した！」
マヒトが青ざめた顔で言いました。

時間の流れる速度が急にうるさいものになりました。
シバは凍りついた顔をしていました。

「就寝前の点呼の時間までは確かにいたんです。けどその後、うちの職員が寢室を確認したらロナンの姿はなくて、鍵が壊されてて、窓が開いてたんです。今、職員の半数ぐらいを割いてオリオン中を探してるんですが、まるで手がかりがないんだ。この街にはあなた以上にロナンのことをよく知る人はいないんです。何処か行きそうなところに心当たりはありませんか？あ、僕は“マゴコロの家”の職員です！」

ナムが混乱しながら言いました。

シバはそれをきくとナムの質問には答えず、“アイス”を持ったままマヒトとナムを突き飛ばすと靴を履いて、外に飛び出して行きました。

「おい、待てよ、心当たりがあるなら……」

マヒトが後ろから叫びましたがシバは振り返らずそのまま闇の向こうに消えました。

「ちくしょう！どういふことだよ、あの爺さんが唯一の手がかりかもしれないってのにっ……！」

「橋よ！」突然、サヤは思い当たりました。

「ロナンが何を考えて出て行って何処にいるかはわからないけどシバは橋に向かったはずよ、ロナンは子供の頃つらいことがあると橋のそばで川を見てたって昨日シバが言ってたもの！」

「子供の頃か…、仕方ない、わかんないけどとにかく街中の橋をしらみつぶしに探して行こう。」

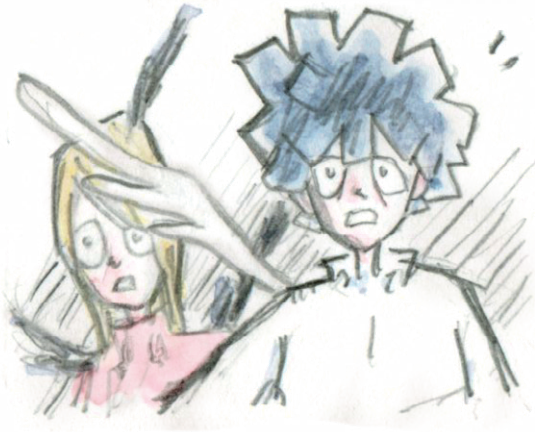
マヒトはそう言う息を切らしたままナムと一緒にシバの部屋を飛び出して行きました。

「僕らも急ごう！」ナムがサヤの方を見てうなずきながら言いました。



タムとサヤはシバの家に近い場所から順に架かっている橋とその周辺をくまなく探してまわりましたがロナンもシバも何処にも見当たりませんでした。走っていた足はしだいに徒歩に変わり、暗闇だった空も白み始めてきました。

2人があきらめかけながら5本目の橋にたどり着いた時、その欄干の上にたくさんの黒いツバサを持った太った男が立っているのが見えました。





……。ロナンでした。

その橋は偶然にもサヤ達とシバが初めて出会った橋でした。サヤとタムはその人物が確かにロナンであることが分かる距離まで近づくとしほつとしましたが、サヤは不意にロナンの様子が妙なことに気づきました。

ロナンは裸足で震えながらじっと水面を見ていたのです。

……。

飛び降りるつもりかもしれない。

そう思ったサヤは思わず叫んでしまっていました。

「ロナン！駄目！こっちへ降りて!!」

その声でサヤ達に気づいたロナンは震えたまま水面とサヤ達の方を交互に見て「来るな!」と言いました。

その一言でサヤとタムは動けなくなりました。サヤは何も言えず、ロナンも何も言いませんでしたが、ロナンはサヤ達の方を血走った目で睨み続けていました。

「あんた達確か親父の知り合いだって奴らだったな…。」

ロナンの口からひび割れたような声が漏れました。

「何で親父は俺の時に“アイス”を授かったんだろうな、その“アイス”がノラの為に使えていたら俺はもっと安らかに呪われていることが出来たはずなのに。」



ロナンは生きることも死ぬことも選べないままそこに立ち尽くしていました。

その時、ロナンの視界の後ろから走り寄ってくる影がありました。

影はロナンに向かって飛びかかると、ロナンの足にしがみついて、不様な体勢のままロナンを欄干から引きずり下ろしてそのまま見苦しくのたうちまわるような動きをしました。

「俺はロナンを愛す。」

影からしゃがれた声が漏れ、緑の閃光がほとばしりました。

その影はシバでした。

シバはロナンのツバサが消えた後もその足にすがりついたまま叫び続けました。

「俺はお前を愛している。俺はお前を愛している。例えばお前が俺を許せなくても、例えば俺が俺を許せなくても、ずっとずっと永遠に愛してる。俺はお前を愛してる…。」

シバは泣いていました。最後の方は嗚咽で言葉になっていませんでした。ロナンは無表情でした。無表情でしたが目には涙がたまっていました。



夜が明けていました。サヤとタムは何も出来ないまま
そのそばで2人を見続けていました。

やがてロナンは自分の弱さを振り払うようにシバを突
き飛ばすと、抑えた声で「親父、頼むから2度と俺の前に
姿を現さないでくれ」と言いました。

「俺もどうしたらいいかわからないんだ。」

ロナンの顔は醜く崩れていました。



完全に太陽が登りきり、また奇跡のように輝く平凡な朝が始まった頃、ナムとマヒトがようやくサヤ達のいた橋までやってきました。それからナムとマヒトはツバサの消えたロナンの法律上の手続きを行う為、ロナンと一緒にオリオン自治組合の本部に行くことになり、とりあえずサヤやナムやシバとはここで別れることになりました。ナムは去り際にナムに向かって「お前、もしまたオリオンから出て行くんならその前に絶てえー俺んちに顔出せよ。今度、勝手に出て行ったら承知せんぞ。」と捨てゼリフを残して去っていきました。

ナムとサヤはシバをシバの家まで送っていきました。シバは道中一言もしゃべりませんでした。が、別れる時、小さな声で「嬢ちゃんに『アイス』を使うって約束、こっちが言い出したのに破っちまって悪かったな」と言いました。その時、サヤは「いえ、そんなの気にしてないわ。私のツバサなら大丈夫、ナムがいるんだから」と少し強がって笑ったのでした。



「解決なんてしてないことだらけだけど僕はサヤを信じてあの光を追ってみてよかったよ。」

宿に帰る為の早朝の道を2人で言葉少なに歩いていたら、タムがぼそりとそうつぶやきました。サヤは同じことを考えていましたが、言わなくても伝わっているような気がしたので何も答えませんでした。

「パキパキ」

その時、サヤは自分のポケットの中の石が、突然、一瞬だけ熱くなったのを感じました。

サヤがポケットの中に手を入れて中の石を触ると石は普通の温度です。サヤは石を取り出しじっと見つめてしまっていました。

「どうかしたの？」サヤが石を見ているとタムがたずねました。

「何だかこの石が泣いてるみたいな気がしたの。」

サヤは答えました。

それをきくとタムは少しあつけにとられたような顔をしました。

「それは嬉しいからなのかな悲しいからなのかな？」

しばらくするとタムはまたいつかのような怯えた目を

しながらサヤにたずねました。

「わからない」少し考えた後サヤは答えました。

「けど嬉しいからじゃないかもしれない。」

「僕にも触らせてよ。」

「パキッ」

タムが石を手にとるとそれにこたえるように石の表面に静かに新しい一本の亀裂が入りました。2人がじっと見ていると亀裂は一つでは収まらずやがて次々に次々と増え続け、最後には石は傷だらけになってしまいました。それは自然な事ではなかったので2人とももちろん驚きましたがどちらとも言いませんでした。

亀裂はこれ以上増えなくなりました。石は歪んだ形になり、それでもやっぱりハートの形をしていました。



タムは苦しそうにその石の形を見ていました。
「これは僕の心の形かもしれない。」
サヤは何も言いませんでした。



「ごめん、…僕はもう僕自身を受け入れるよ、…醜さも
やさしさも全部含めて。」

タムはまだ少し怯えながら、それでもしっかりと石を
握って言いました

「パキン」

タムが石に約束するとその石はそれに答えるように真つ二つに割れてしまいました。

「これは何て意味なんだろうね？」サヤがタムを見守りながら微笑んでそうつぶやくと、タムはその言葉を発したサヤの方を見たままかたまってしまいました。

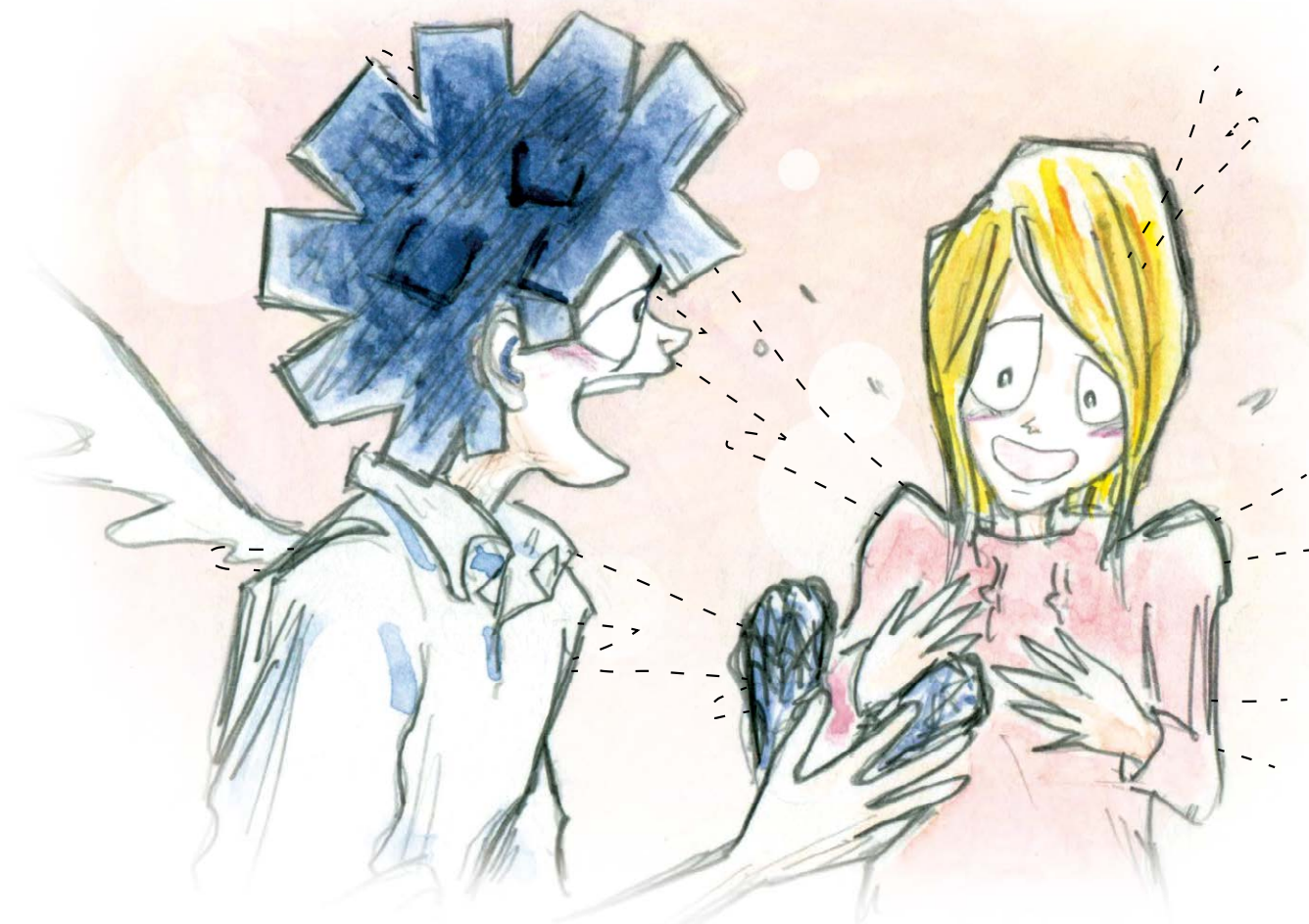
「どうしたの？」とサヤがたずねるとタムは複雑な笑いをしながら「サヤこそどうしたんだよ？」と言いました。

「え？」

サヤが当惑していると、タムが石を見て泣きそうな顔で笑いました。

「心を分け合えって言ってるのかもしれない。」

サヤが気づくとサヤの黒い羽はすべて消えていました。



「この石、半分だけもうしばらく僕にかしてくれないかな？」

しばらくツバサの消えたサヤを見て微笑んでいた後、やがてタムは何かを思い出したような顔をして、割れた石の半분을サヤに差し出すと言いました。

「半分？ どうして？ そんなの、だったら全部タムに返すよ。やつぱりこれはタムが大切に持つてるべきものだと思うし。」

サヤがそう言うと、タムは少し言いにくそうに「いや、もしよければサヤに持つててもらいたいんだ。『僕が更にもうちょっと大人になった記念』にね」と言つて少し強がつているような顔をつくりました。

「けどだからこそ僕が更にもうちょっと大人になれるまでの間だけこの半분을僕にかして欲しい。」

サヤはタムの顔を見ました。するとタムもサヤの顔を見て少し恥ずかしそうに苦い顔をしました。

「僕はあの時、ヒズメさんの手をにぎりしめるべきだったんだと思う。必要なのは『アイス』じゃなかった。誰かと心を分け合つて生きるってことは、救うとか、救われるとか、自分は価値のある人間かどうかとか…、たぶんそういうこととはあんまり関係がない。あの時のシバみたく不様に目の前の人を抱きしめてその都度傷ついてく…、そんな方法でしか心は分かち合えないんだ。」

アンドロメダに帰ってもう一度ヒズメさんに会つてく
るよ。ヒズメさんに自分の気持ちをちゃんと伝えること
が出来たらサヤにこの石の半分を返しに來たい。：誰か
との約束がないとまた逃げてしまいそうだからさ。」

タムはまた相変わらずの不器用な微笑みを見せました。

サヤはそれをきいてしばらく黙っていました。

タムの見つけたタムなりの“愛す”は美しいと思いまし
た。けれどそれが決意になってしまう歪みは哀しいとも
思いました。けど、きつとタムはやっぱりこれからその
歪みを抱えて生きていくしかないのだと思いました。サ
ヤがサヤの歪みを抱えて生きていくしかないのと同じよ
うに。それはシバにもロナンにもマヒトにもナムにも、
そしてきつとそのヒズメさんという女のヒトにも言える
ことなのです。

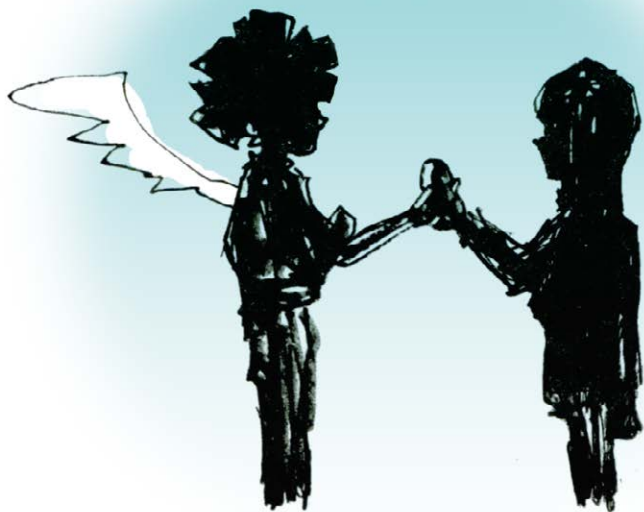
「言いにくいけど、もう手遅れかもしれないよ。その人
は相手の人がいたんでしょ。それに女の口はあらたまつ
た理屈とかそういうんじゃないから。」サヤは言いました。
「そうだね。けどそれでもやっぱり僕は彼女の口から何か
ききたいんだ。」

サヤは何か言った方がいい気がしましたがそれ以上何
も言わないことにしました。

「わかった。仕方ないからフラれて帰ってきたら残りの半分、受け取って笑ったげるよ。」

けど、心と心にはやっぱり繋がる瞬間がある。

サヤは気づくとハートの石の半分を受けとっていた。



数日後、タムはアンドロメダへと帰る旅路につくことになりました。今度の旅はもうサヤと一緒にではありません。サヤはオリオンに残ってナムやマヒトに協力してもらいながら自分の元居た世界へ帰る方法を探すことになっていたのでした。

出立の朝が来ました。タムは靴紐を結びながら、前日にサヤが「タムが独りぼっちを卒業して私に石を返しに来るのが先か私が元の世界に帰っちゃうのが先か競走よ」と言っていたのを思い出して、思わず独りでほくそ笑んでしまっていました。

タムが出て行く時、ナムとマヒトが城壁のすぐそばまで見送りに来てくれました。タムは出て行く前にサヤの顔をもう一度見たい気がしましたが、サヤは来てくれてはいませんでした。「あのコは気まぐれだから」タムはそうひとりごちると、ナムとマヒトにお別れを言って旅立つことにしました。

「いろいろなことがあったなあ…。」

タムがオリオンでの様々な出来事を思い出しながら街道へ入る為の細い道を進んでいると街道の入口にポツンと立っている木の下に人影が見えました。



サヤでした。

「何だ、来てくれてたんだ。よかった。行く前に君の顔が見れて嬉しいよ。」

タムは少しびびくりしましたが素直によろこびを言葉にしました。

「別にタムを見送りに来たわけじゃないわよ、…私、画を描くのが好きなの。今日は天気が良かったからここから見たオリオンの街を描こうと思ってここに来たのよ。」サヤはぶつきらぼうを装うように言いました。

「そう、まあ何にせよ僕はここで君に会えてラッキーだったよ。画が出来たら今度会った時に見せてよ。」

「うん、楽しみにしててよ、私すっごく上手いんだから。」サヤは明るく笑いました。

「ああ、楽しみにしてるよ。じゃあまた、いい画、描けるといいね。」

タムは少しサヤの態度に不自然なものを感じた気もしましたが、ここでサヤに会えたことでこの先の孤独な“山越え”を乗り越える元気が湧きました。これで心残りなくアンドロメダへ向かえる、タムは前を向いて歩き始めました。

突然後ろから声がしました。

「馬っ鹿じゃない、私、画を描く道具なんて持ってないじゃない。私、中学校の美術の成績とか3以下しかとったことないし。」

タムが何がなんだかわからないと思いながら驚いて振り向くとサヤが真っ赤な顔で怒っていました。

「タムに会う為にココで待ってたに決まってるじゃない。気づかないとかマジありえないんですけど。」

サヤは何だか震えているようでした。タムは今まで見なかったサヤの一面を見た気がしました。

「やっぱりタムは自分しか見てないじゃない。そんなじゃどうせ行ってもフラれるだけよ。…それを忠告してあげに来たの。」

「ごめん、ありがと。やっぱりサヤにはかなわないや。」

しばらく面食らった後、タムは優しく微笑みました。

「私は好きだから。」
突然サヤが言いました。

「私はタムのこと好きだから。」

タムがどう答えていいかわからず何も言えずにいますとサヤは泣き始めてしまいました。

「勘違いしないでね、変な意味じゃないから。」
そう言いながらもやっぱりサヤの涙は止まりませんでした。



タムは初めてサヤという他人の存在の大きさに気づいた気がしました。タムはサヤに言わなければならぬことがある気がしました。

タムの口から自然に言葉が出ていました。

「俺も大好きだよサヤのこと。けどこの先はどうしても1人で行きたいんだ。」

サヤはただ泣いていました。

「俺は君に救われたと思う。」

それは数少ないほんとうのことでした。

「ごめん……心って不自由だね。」

「あやまらないでよ、何か私がタムにフラれてるみたいじゃない。」

「わかった。じゃあ行くね、ありがとう。」

タムはサヤを残して去っていきました。

その時サヤは不意にこの世界に来る前、病院で自分が神サマに祈ったネガイの内容を思い出しました。

サヤは心臓の病気で一年前からずっと病院に入院していました。そして麻酔の後サヤが受けることになったいた手術は命に危険が及ぶ可能性もある大きな手術だったのです。

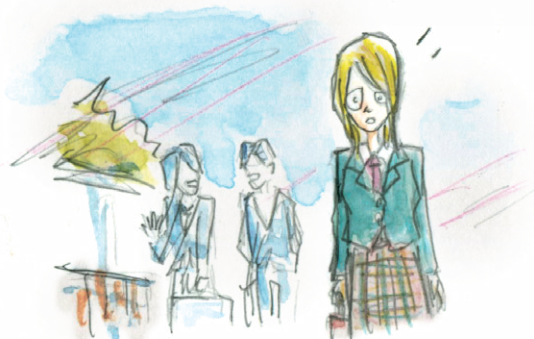
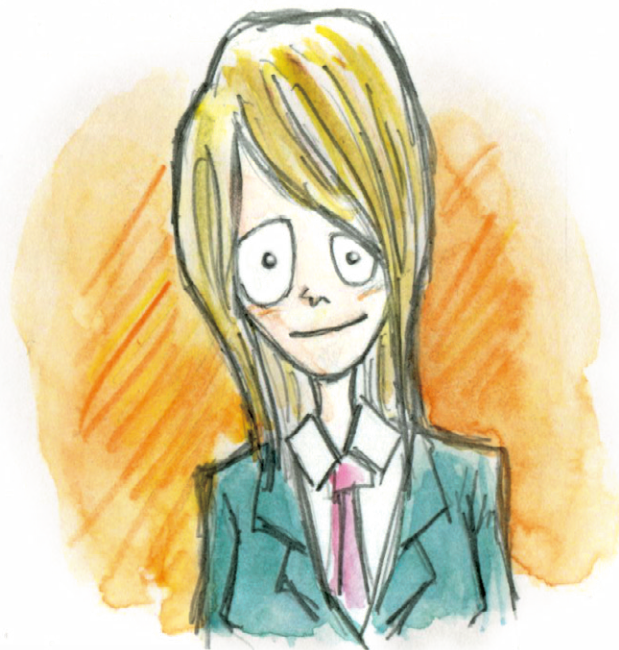
だから手術の前、サヤは神サマに祈りました。

「神サマ、私は何の為に生まれてきたのですか？私は死ぬ前までに『愛す』ということが知りたいです。」と。

それを思い出した時サヤの身体は光になってタム達と
すごした世界から姿を消したのでした。



エ
ピ
ロ
ー
グ





「この石どうしたの？」

「ああコレ、もらいもの。」

「え、誰に？もしかしてボサボサの髪した男の人とかじゃない？」

「気持ち悪いこと言うなよ、……中学の頃好きだった同じ部活の先輩にコクったら振られて、振られたのに何かよくわかんねーけど流れてコレもらったんだよ。」

「えっ、その先輩って男？」

「ふざけんなよ、その歳で腐女子とかマジ終わってんし。」

「へー。そうなんだ。実は私も似たようなの持ってるんだ。」

「どうしたんだよ、それ？」
「私も同じ、昔好きだった先輩からもらったの。もちろん私もフラれたんだけどね。」





おしまい

おかもと たくや プロフィール

1982年 岡山県生まれ、広島県育ち。信州大学人文学部中退。

大学を中退して漫画家を志すも挫折。本屋店員などをしていたが、画を描くことを捨てたくないと思い立ち、現在、グラフィックデザイン関係の仕事に就く為、穴吹デザイン専門学校で勉強中。

乏しい人生経験しか持っていませんが、この本にはその中で感じてきた様々な感情を詰め込んでいます。